

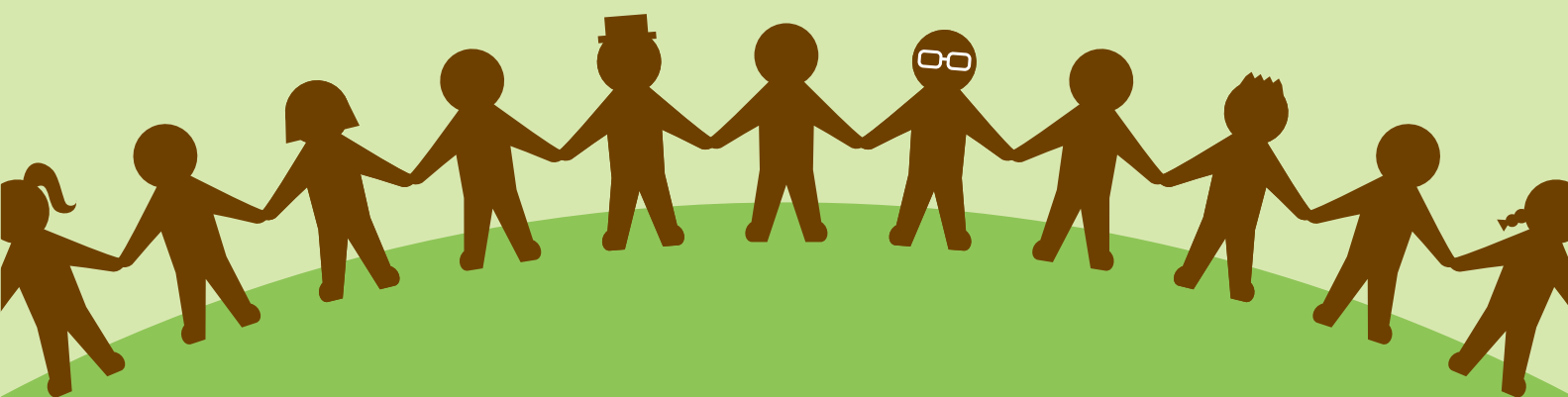
2013年度21世紀かながわ円卓会議

自治体首長、実務家、研究者、ジャーナリスト
そして、あなたとともに描くかながわの未来

community capacity

地域力を いかに育てるか

～“分かち合い”で築く かながわ の未来 Ⅱ～



公益財団法人かながわ国際交流財団 湘南国際村学術研究センター

地域力をいかに育てるか

～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～

公益財団法人かながわ国際交流財団
湘南国際村学術研究センター

目 次

開会挨拶	4
福原義春 公益財団法人かながわ国際交流財団理事長	
趣旨説明 地域力をいかに育てるか～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～	7
モデレーター：神野直彦 東京大学名誉教授	
講演 1 村民とともに歩む地域づくり～子ども・若者が元気な村に～	13
講師：伊藤喜平 長野県下條村長	
講演 2 新しい地域自治～地域の課題を地域で解決するために～	19
講師：平井竜一 逗子市長	
基調講演 生きている共同体とは何か ～関係を生み出す社会デザインを考える～	27
講師：内山 節 哲学者	
基調講演／討議〈冒頭発言〉	37
山梨崇仁 葉山町長	
事例報告 1 多様ななかわりによる子どもの育ち	41
奥山千鶴子 NPO 法人びーのびーの理事長	
事例報告 2 地域全体を見据えた高齢者ケア	47
加藤忠相 小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん経営者	
対 談 地域力を育てる鍵は？	53
早野 透（桜美林大学教授／元朝日新聞編集委員）	
高島肇久（株式会社日本国際放送特別専門委員／21世紀かながわ円卓会議運営委員）	

（注）各講師の発言内容及び小見出し等の編集に関する文責はすべて公益財団法人かながわ国際交流財団にあります。

本書は、公益財団法人かながわ国際交流財団および神奈川県主催により2013年11月9・10日（土・日）に湘南国際村センター（神奈川県葉山町）にて開催された、21世紀かながわ円卓会議「地域力をいかに育てるか～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～」における講演記録をもとに加筆・修正したものです。

なお当日プログラムについては次ページをご参照ください。また掲載されている所属・役職名・プロフィールは開催当時のものです。

プログラム

11

9

13:30

17:00

開会挨拶	13:30	福原義春(公益財団法人かながわ国際交流財団理事長)
趣旨説明	13:40~14:10(30分)	モデレーター 神野直彦(東京大学名誉教授)
第Ⅰ部 【制度として】地域力を育てる制度		
講演 1	14:10~14:40(30分)	「村民とともに歩む地域づくり～子ども・若者が元気な村に～」 伊藤喜平(長野県下條村長)
講演 2	14:40~15:10(30分)	「新しい地域自治～地域の課題を地域で解決するために～」 平井竜一(逗子市長)
	15:10~15:30(20分)	コーヒーブレイク
討 議	15:30~17:00(90分)	「住民自治を高める地域力」 冒頭発言 1：鈴木高雄(平塚市市民部長) 冒頭発言 2：林 秀明 (神奈川県政策研究・大学連携センター～シンクタンク神奈川～所長)
1日目終了	17:00	

11

10

9:30

17:00

前日の振り返り	9:30~9:40(10分)	モデレーター 神野直彦
第Ⅱ部 【主体として】コミュニティを担う多様な主体		
基調講演	9:40~10:30(50分)	「生きている共同体とは何か ～関係を生み出す社会デザインを考える～」 内山 節(哲学者)
討 議	10:30~11:00(30分)	冒頭発言：山梨崇仁(葉山町長)
話題提供	11:00~11:20(20分)	・子ども(多様なかわりによる子どもの育成) 奥山千鶴子(NPO法人びーのびーの理事長)
	11:20~11:40(20分)	・高齢者(地域全体としてのケアを支える側／支えられる側からの脱却) 加藤忠相(小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん経営者)
討 議	11:40~12:20(40分)	
	12:20~13:20(60分)	昼 食
第Ⅲ部 【機能として】地域力を育てるビジョンづくり		
ダイアログ	13:20~15:20(120分)	「地域力を育てるビジョンづくり」 ファシリテーター：世古一穂(NPO法人NPO研修・情報センター代表理事)
	15:20~15:40(20分)	コーヒーブレイク
対 談	15:40~16:30(50分)	「地域力を育てる鍵は？」 早野 透(桜美林大学教授／元朝日新聞編集委員) 高島肇久(株式会社日本国際放送特別専門委員／21世紀かながわ円卓会議運営委員)
全体ダイアログ	16:30~16:50(20分)	講師・討議者・一般参加者からのコメント
総 括	16:50~17:00(10分)	モデレーター 神野直彦
閉 会	17:00	

■討議者の方々：50音順

泉 一弘 NPO法人ふらっとステーション・ドリーム理事長
伊藤 喜平 長野県下條村長
内山 節 哲学者
江成 卓史 NPO法人子育ての里 食と遊 副理事長
小川 泰子 社会福祉法人いきいき福祉会専務理事
奥山千鶴子 NPO法人びーのびーの理事長
加藤 忠相 小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん経営者
川崎 あや 一般社団法人インクルージョンネットよこはま理事

後藤 千恵 NHK放送文化研究所メディア研究部
鈴木 高雄 平塚市市民部長
世古 一穂 NPO法人NPO研修・情報センター代表理事
中嶋 弘孝 神奈川新聞社論説主幹
林 秀明 神奈川県政策研究・大学連携センター～シンクタンク神奈川～所長
早野 透 桜美林大学教授／元朝日新聞編集委員
平井 竜一 逗子市長
山梨 崇仁 葉山町長

■21世紀かながわ円卓会議の企画を立案した運営委員会委員

樺山 紘一 印刷博物館館長／東京大学名誉教授
高島 肇久 株式会社日本国際放送特別専門委員
黒田 玲子 東京理科大学教授／東京大学名誉教授

福原 義春 公益財団法人かながわ国際交流財団理事長
武藤 誠 公益財団法人かながわ国際交流財団常務理事



開 会 挨 拶

かながわ国際交流財団理事長 福原 義春

皆さん、こんにちは。

本日は「地域力をいかに育てるか～“分かち合い”で築くかながわの未来～」の2回目ということで、この円卓会議を開かせていただきます。湘南国際村は、富士山がとてもきれいに見える所ですが、今日はあいにくの天気です。海も富士も見渡すことのできない天候です。

さて、お集まりいただきましたこと、ありがとうございます。この円卓会議は、財団の国際湘南村における基幹事業の一つであり、テーマはそれまでの議論の成果を踏まえ、そして、その時代の風潮も考慮し設定しながら、これまで13年間継続してまいりました。

2000年度に初めて開催したときには「グローバリゼーション」をテーマとして、グローバリゼーションというのはいったい何だろうか。グローバリゼーションになると、私たちの生活や地域にどのような変化があるだろうか、それに対してどう備えるかということを議論してきました。そうした分野の研究者、政治家、ジャーナリストの方々と何回も討論を重ねているうちに実際にグローバリゼーションが始まってしまったわけです。

そして、その負の側面として、グローバリゼーションの潮流に押し流され、生活様式が画一化したり、あるいはコミュニティの崩壊が進んだり、あるいは地域の独自性や多様性がますます失われていくようになりました。そこで、ここ数年のテーマの根底には、そうした現実をどのように捉え、そして向き合っていけばよいのか、という問題意識を持ち、多様な角度から議論を展開してまいりました。

特に、昨年度・今年度（2012・2013年度）の2カ年のテーマは、一昨年に発生した、東日本大震災や原発事故を受けて、「地域力」をテーマに設定し、昨年は、私たち一人ひとりがこれからの地域社会をいかに描いていき、また、その担い手となるか。そのためにはどういったかたちが考えられるか、ということをお皆さんと話し合いました。「地域力」の2回目となる今年度は、前回の議論を踏まえながら、「地域力をいかに育てるか」というテーマで3つの切り口から考えることにしています。

1つ目は「地域力を育てる制度」ということで、住民が主体的に地域の課題に取り組むための制度として住民自治協議会に着目しました。県内の幾つかの市町村ではそういう取り組みが本格的に始まりつつあります。2つ目は「コミュニティを担う多様な主体」です。県内の取り組み事例も踏まえながら、コミュニティやその担い手の在り方について考えてまいります。3つ目は「地域力を育てるビジョンづくり」であります。私たち一人ひとりが担い手になるときにどのような役割が求められるのか。実際に、対話を通して会場の皆さんと考えていければと思っています。

本日の講師としては、はるばる長野県下條村からおいでいただいた伊藤村長と、この湘南国際村からほど近い逗子市の平井市長。そして明日の討議者として、まさに地元葉山町の山梨町長の3人の首長さんをお迎えすることができましたこと、お礼申し上げます。また明日は、日本社会の共同体の歴史を踏まえて、共同体を基盤としてこれからの社会デザインの将来像を見据える哲学者の内山節さんの基調講演。そして、県内でコミュニティの課題に取り組んで成果を上げている方々の現場の話を聞きながら、神奈川の地域力を鍛えるための知恵を会場の皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

そのような次第で、まずは参加者の皆さんに申込時にご意見を書いていただいて提出していただきました。明日の2日目には、討議者の方々と共に参加者の皆さんがテーブルごとに話し合うダイアログの時間も設けてあります。また、この話し合いの様子はUstreamにおけるインターネット上の同時中継をするということでご理解をいただく必要があると思っています。そのUstreamによって、この会場にいらっしやらない方にも広くこの議論を

共有していただくことができるのではないかと考えています。

2日間にわたる話し合いの全体のかじ取り役は、前回に引き続きまして、地域の再生問題に取り組み、「分かち合いの経済」を説く、東京大学名誉教授の神野直彦先生にお引き受けをいただいております。

それから、プログラムを開いてご覧いただきたいのですが、今回も実にさまざまな分野で活躍されている討議者の方々にお集まりいただきました。お忙しい折、誠にありがとうございます。あらためてお礼を申し上げたいと思います。

少子高齢化がますます進んでいく私たちの社会では、21世紀にあるべき地域社会や絆の深いコミュニティの姿を描き出し、私たち一人ひとりがそのために何ができるかを考え、行動することが求められております。そうした思い、あるいは関心を持ってお集まりいただきました皆様方がお持ちの知見を披露していただくために、2日間のプログラムに皆様にも積極的に加わっていただくことを期待しております。

会場にお集まりいただいた全員の方々が、それぞれの思い、願いを紡ぎ合って実践していくことで、私たちの子どもや孫たちの未来を切り拓くことができるきっかけになると考えています。そのように願いながら開会のあいさつとさせていただきます。

地域力をいかに育てるか

～ “分かち合い” で築くかながわの未来Ⅱ～

趣旨説明

地域力をいかに育てるか ～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～

モデレーター：神野直彦（東京大学名誉教授／地方財政審議会会長）

はじめに
地域の問題を見つめて
問題解決能力と絆の力
制度、主体、機能という3つの切り口
仏もつくって魂も入れる
再生可能資源が再生力を失い始める
社会の自己再生力こそ地域力

プロフィール：神野 直彦（じんの・なおひこ）

東京大学名誉教授

1946年生まれ。専攻は財政学・地方財政論。政府税制調査会会長代理、総務省・地方財政審議会会長も務める。主な著書に『地域再生の経済学』（石橋湛山賞受賞、中央公論新社）、『システム改革の政治経済学』（エコノミスト賞受賞）『人間回復の経済学』『財政のしくみがわかる本』『教育再生の条件 ―経済学的考察』『「分かち合い」の経済学』（以上、岩波書店）、『財政学』（租税資料館賞受賞、有斐閣）、『税金常識のウソ』文春新書、『失われた30年―逆転への最後の提言』（NHK出版新書、金子勝氏との共著）等。その他編著書多数。



趣旨説明

地域力をいかに育てるか ～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～

モデレーター：神野直彦（東京大学名誉教授／地方財政審議会会長）

はじめに

モデレーターを務めさせていただきます神野でございます。よろしくお願いいたします。

この21世紀かながわ円卓会議にご参加いただきましたことを、私からも改めてみなさまに御礼を申し上げます。次第でございます。

私は現在、「年をとる」という、生まれて初めての経験をしておりまして、先ほど、伊藤村長からも「目は大丈夫ですか」とご心配をいただきました。ただ実際のところ大丈夫ではなくて、12月にいよいよもう一度、手術をしなくてはなくなりました。ほとんど目が見えず、耳も遠くなっており、次に言う言葉が出てこないというような状況で、戸惑うことばかりでございますので、皆様にご迷惑を掛けるかもしれません。あらかじめおわびを申し上げておく次第でございます。

さて、趣旨説明ということですが、ただいま理事長より明確にお話をいただいております。この21世紀かながわ円卓会議は、新しい世紀である21世紀が夜明けを迎えるとともに始まりました。私の言葉で表現させていただければ、神奈川から新しい社会ビジョンを国民国家の枠組みを越えて世界に偉大な物語として発信しようということで生まれた会議だと理解しております。

地域の問題を見つめて

21世紀とともに始まり、2001～03年の3カ年にわたる第1次シリーズでは「グローバリゼーション」を取り上げました。その後、2004～06年の第2次シリーズでは「21世紀を構築する」というテーマのもと、いずれにしてもグローバリゼーションという現象の光と影を見つめてきたと言っていいのではないかと思います。その後、グローバリゼーションの影の部分が非常に大きくなり、理事長からもご説明いただいております。

すように、地域社会の文化が画一化され、地域の多様性が失われるという側面が非常に大きくなってまいりました。そこで、その後はローカリゼーション—グローバリゼーションとローカリゼーションを合わせて「グローカリゼーション」という言葉もありますが—地域の問題を見つめてきました。

2008・09年度の第3次では、「新しい都市と地域」という統一テーマで行っておりますし、10・11年度の第4次では「コミュニティが育む人間性」というテーマのもと、コミュニティの問題を取り上げながら再創造していくことに取り組もうとしたのですが、不幸なことに2011年に、皆様ご存じのとおりには日本は東日本大震災という自然災害の大危機に見舞われました。そこで、このときに、例年、年度末にやっていたものを秋冬のころに開催するようになりました。昨年度・今年度の第5次では「地域力」をテーマとして震災の経験も踏まえつつ、昨年度は「地域力を鍛える」、そして今回は「地域力を育てる」というテーマでこの会議を運営させていただこうかと思っております。

問題解決能力と絆の力

そこで「地域力」についてですが、私の理解では、これを言い出したのはロバート・チャスキンの人で、地域力は、「地域社会に生じている共同の不幸や共同の困難を、その地域社会が解決していく能力」と定義されております。チャスキンのよれば、この地域力には、2つの側面があり、ひとつは「地域社会を構成する構成員一人ひとりの問題解決能力」、そして、もう一つは社会資本というか、チームワーク、絆の力ですね。この、お互いに凝集していくネットワークを構成した力は、ソーシャルキャピタル、社会資本あるいは社会関係資本と通常、訳されています。地域力は、個人的な問題解決能力と社会資本という2つの側面で規定されるとしております。

前回は「地域力を鍛える」というテーマのもと、皆

様もご存じの世界的に有名な建築家である伊東豊雄先生に基調講演にお話しいただきました。「みんなの家に込められた思い」というテーマの基調講演から始め、地域力の場づくり。場をつくっている、つくりを中心に議論したかなというのが私の印象でございます。これはソフトの面を含めてですが、場づくりということで進めたのかなと思っております。

この前回の「地域力を鍛える」というテーマで開催した円卓会議の最後に、理事長は次のように総括をされています。つまり、ご発表いただいた、NPOで活動されている方々のさまざまな発表を聞き、そうした活動に理事長が感銘したということをお話になった上で、こうした、みなさんのようなリーダーがどのように育っていくのか、つくられていくのか。こうしたリーダーがビジョンを描いて発信できるような、こういうリーダーを育てるのはどうしたらよいのだろうかというようなテーマを投げ掛けられましたので、それを受けて今回は、人をつくっていくという人づくりの側面にスポットライトを当てながら進むようにしております。

制度、主体、機能という3つの切り口

さて、この人づくりも、先ほど言いましたようにチャスキンの定義でいえば、それぞれの構成員の個人を強めていく力を、問題解決能力を高めていくと同時に、社会資本というネットワーク、人と人とのネットワークの絆を含めた人づくりだと理解できると思います。これもただいまの理事長の問題提起にありましたように、こうした地域力づくりを縦糸にしなが、織物でいいますと横糸は何で織るかということ、横糸は3つ、切り口は3つというお話をいただきました。制度、主体、機能という3つの横糸——切り口でもいいですが——を持って錦を織りなしていこうと考えております。

まず「制度」については、地域力を育てていく器づくりをどのようにするのかというのが制度づくりだと考えると、主体と機能については培養する中身に関わってきます。その「主体」については、「地域力を育てる主体」と「地域力を担う対象としての主体」という2つの側面がありますが、いずれにしても、その主体は、地域の住民、市民です。地域社会の構成員が主体になるということは間違いなくて、その主体が個人であろうと、もう一つ重要なのは、繰り返すようですが、絆というか組織をしていくという両側面があり

ますけれども、そういう主体づくりだと考えられるかと思います。

培養していく中身について、主体と機能とに分かれますが、培養は、字引を引いていただければ、英語ではcultureと表現しますから、これは文化に通じるものです。つまりは、培養するものはカルチャー、地域文化となるかと考えております。制度や主体については、いわば「仏作って魂入れず」と言われますが、“仏”にあたる器や制度、“魂”となる主体に対して、「機能」はそうした制度を動かすことではないかと思えます。

ちょっとわかりにくいのですが、制度や主体は、ピクトイメージ——画像ですね——であるのに対し、その機能を考えるということは操作像にするということかと思えます。これは有名な『ピグマリオン』というお話のなかで、ギリシャのクレタ島の王様が島に横たわっている彫刻の彫像に恋をいたします。この彫像は画像なわけですね。絵で描いたような像なのにもかかわらず恋をして、海神、海の神ネプチューンに願いを込めて、命、生命を入れていただくと、それが動き出すわけですね。これは操作像、操作していく、動く、実際に動いていく像にするということになりますので。「画像を操作像にする」というお話で有名なのはこの『ピグマリオン』という神話なのですが、この『ピグマリオン』をバーナード・ショーが戯曲化すると『マイ・フェア・レディ』というミュージカルになるわけですね。簡単に言ってしまうと、理想的な女性を操作像として作り上げるという話ですが。

仏もつくって魂も入れる

さて、ここで機能を入れたということは、私たちは地域力を育てる画像だけではなく、操作像を描いていこうと考えています。画像とともに動き出していく、息吹を入れた、つまり、「仏を作って魂も入れる」ことも考えてデザインしていこうということが、今回の「地域力を育てる」というテーマで考えていることだと受け止めていただければと思います。

さて、この1年間は私の考えではあまりいい年ではありませんでした。事実、今回のこの会議は13回目、不吉な数字である13回となります。私は、住まいにクーラーがなく、信州の山の中に仕事部屋を持っております。今年の4月初めには、もう夏のような季節になってしまったので、部屋を開けに行かないと駄目かと思い、行ってみたら、道中でもうすでに熊本産のスイカを売っていました。小玉スイカではなく、大きな

スイカです。買って、仕事場に入り、明くる日、目が覚めて窓の外に目を向けると、驚くべきことに30センチぐらいの積雪です。この冬は北海道では父親が子どもをかばって亡くなった、痛ましい事故があったときです。4月下旬のことでしたが、大雪の年で、連休もずっと大雪でした。30センチ積もられると、もうどこが歩く道かわからない。怖くて山を下りられませんか、食べるものはスイカしかなくて、雪見ズイカになりました。

どこかが狂い始めて、しかもその原因は人間ではないかと自覚しないといけないのではないかと。その後、起きたことは皆さんご存じのとおり、7月初めから真夏日でした。世界各国のトップニュースはだいたい異常気象ですね。熱波、洪水、竜巻、ヨーロッパでも日本でもアメリカでも、そして今でもアメリカは洪水だと言っているわけですから、異常気象に振り回される。

人間は気象に左右されないで生活できるようにするために農業をつくりました。狩猟経済であつち行ったりこっち行ったりする生活ではなく、ある一定の所にとどまるために農業をつくったのですが、その人間がつくり出した気候変動に左右されない生活をしたいと願った人間が気候変動を逆につくり出して、自らの命も危うくしているのではないかと考えています。

この命を育ててくれた水色の惑星と共に歩む人間の歴史もいよいよ終わりを告げるかなと思います。皆様もご存じのとおり、一般的に地球温暖化についてはしきい値効果と呼ばれるものがあり、ある一定の水準までは地球の温暖化としてずっと進んでいくのですが、あるしきい値を超えてしまうと一挙に異常気象が起きてくるというものです。これは素人考えですが、しきい値を突破したのではないかと思います。

再生可能資源が再生力を失い始める

私たち人類は、成長の限界ということで、まず、生活をする場についての警告をいたしました。ただ、この成長の限界というのは、再生不能資源、石油とか石炭とか、原子力もウランとか、あれも再生不能資源ですから、そういう再生不能資源には限界がある。それが成長の限界になるんだという問題意識だったと思いますが、それを突破して、私たちは再生可能資源の再生力を失い始めたのではないかと。成長の持続可能性とよく言いますが、私に言わせれば、持続可能性というのは、自己再生力を持っている自然を維持していく、自己再生力を持続可能にするということではな

いかと思っています。

これだけ洪水があると、この洪水は謀略に満ちたこの地を神が裁いて洪水を起こした。つまりノアの箱舟の神話そのままに、正しく、かつ全きの人にはノアの箱舟を造れということを神が諭されているのではないかなと思うような状況になっています。

社会の自己再生力こそ地域力

もう一つ、地域力との関係でいえば、深刻なのは人間の社会の自己再生力です。人間の社会とは、誰に言われなくても自己再生していくものはずなのに、これが失われてきた。この社会の自己再生力こそが地域力で、これすらも失い始めているのではないかという、怯えすら感じます。

この今日の会議は、私の考えでは少なくとも2つのことを前提にしています。ひとつは、神の恩寵は失われていないという前提です。つまり、足場を固めて、人々がかけがえのない能力を出し合えば、まだまだ私たちがこの地域から新しい社会に転換していくための時間は残されているんだという前提です。

さらにもう一つの前提は、私たち人間はホモエコノミクス、人間が全て商人、アダム・スミスの言葉を使えば商人だと。みんな何でもかんでもお金で換算して生きる価値というのを評価するような人間になってしまったと思いますが、スウェーデンの生物学者リンネは、さまざまな分類をして、学名をつけていましたが、人間についても、その学名として、賢くも、ホモエコノミクスではなくホモサピエンス、つまり“知恵のある人”という学名を採用しております。

したがって、人間はまだまだそれぞれが、かけがえのない知恵を持っており、私たち人間は未知の大海に海図を描いてあえて船出をしようとする期待の存在だということをもう一度再認識して、繰り返し繰り返し、船出をしていく。今日、私たちは、ここで多くの人々が集いながら、知恵を出し合って、未知の大海に船出をする海図を、地域力を育てるということを通して描いていければと思っています。

以上、雑ばくで話が少し飛んだところもありました。ただ最後に、ここに私たちはこの会議をミューズの神——ミューズはご存じのとおり学芸の女神たちですね——捧げたいと思います。捧げたいというのは変ですが、ミューズにささげる場というのはエジプトのアレキサンドリアに初めて造られて、ミューズにささ

げる場のことを私たちは博物館と呼んでいます。つまりミュージアムですね。ここがそういう意味ではソフトなミュージアムとして新たなビジョンをここ神奈川から発信できればと考えております。

以上で、私の冒頭の趣旨説明を終わらせていただきます。

地域力をいかに育てるか

～ “分かち合い” で築くかながわの未来Ⅱ～

講演 1

村民とともに歩む地域づくり ～子ども・若者が元気な村に～

伊藤喜平（長野県下條村長）

はじめに
合併しても効果が出ない
政治家の出る風土
村を支えた養蚕
議会の限界を感じて村長に
民間企業の厳しさを体験
少数の体制が精鋭を育てる
土木工事は地域の住民で
隗より始めよ
節約されたお金で基金を
高い出生率と若年人口率
一生懸命使うための基金
将来に向けた投資を
目的意識を持ち有機的な組織に

プロフィール：伊藤 喜平（いとう・きへい）

長野県下條村長

1953年長野県立飯田高等学校卒業。1975年4月 過疎化が進む村を憂いた商工会青年部を中心とした若者に推挙され、村議会に出馬当選する。以来3期連続当選。1987年4月から4年間村議会議長を歴任。その間、村営上下水道の建設委員長、統合保育所建設委員長などの事業を建設委員長としてまとめ上げる。1992年7月下條村長に就任※、村長として現在6期目、22年目にはいる。

職員の意識改革に取り組み、行政のスリム化を実現する。材料支給事業、全村合併処理浄化槽一本の推進などユニークな事業の取組みにより、財政の健全化を実現する。起債制限比率マイナス4.5%（連続4年県下第1位であり、連続4年全国第4位）。若者定住促進や魅力ある村づくりに取り組み、減り続けていた人口に歯止めをかけ、若年人口比率16.1%、合計特殊出生率1.86人を達成する。

※2003年5月に下伊那郡町村会長、2006年10月には長野県町村会副会長に推挙され、郡下だけでなく県下の町村のリーダーシップを現在も担っている。



講演 1

村民とともに歩む地域づくり ～子ども・若者が元気な村に～

伊藤喜平（長野県下條村長）

はじめに

長野県の下條村長の伊藤でございます。本日、そうそうたる皆さん、そして常にご指導いただいている神野先生の横に座らせていただき身の固くなる思いでございます。私は別に難しい話はできません。ただ、田舎の村長として、22年目になりますけれども、たどたどしく今日までやってきたらこういう答えが出たということをご皆さんにご報告申し上げ、そして、またいろいろ貴重なご意見をお聞かせいただければありがたいと思っております。

長野県は南北に長い県でございまして人口が220万人ほどです。下條村は、長野県の最南端下伊那郡のほぼ真ん中にあり、県庁へはノンストップで行っても2時間半かかります。愛知県庁へは1時間半、岐阜県庁にも1時間半、そしてまた、静岡の県庁もそろそろ1時間半で行けるようになる、そうした位置にあります。

人口は4,100人から4,200人程度です。みなさん、非常に小さい村だと思うでしょうが、下伊那郡の中には13町村があり下條村は中程度の規模でして、大きい方では1万3,000人ぐらいの町が2つ、そして小さい村では600人を切るような村が2つあります。

合併しても効果が出ない

なぜそんなに小さい村が林立しているかと言えば、下伊那郡だけで四国の香川県並みの広さがあり、その86%を林野が占め、山と川と谷のあいだにぽつぽつと集落があります。平成の大合併により120の市町村が77になったところで、これ以上、合併しても効果が出ないということで今ストップしております。

それから、また交通の便が悪いところでもあります。今朝、私は7時に家を出て、中央線を使い、その後、逗子駅からはタクシーで来て、だいたい12時半になりました。いやあ、日本は広いなということを感じさせていただいたわけでございます。ただ13年後には

中央リニア新幹線が開通する予定で、現在、工事が始まっております。13年後には品川から私どもの隣の飯田市まで最高時速505キロを出し40分で行けるようになるそうです。それから、ほとんどラインは真っすぐでございまして、地下をはってくるわけでございまして、アルプスのど真ん中を突っ切ってくるそうです。ただ生命には限界があるわけで、どうも私は乗れないかなと思っているところです。

政治家の出る風土

それから、私の村はなぜか輩出される政治家が多いです。下條村に生まれ育った中で、私がお手伝いしただけでも衆議院が3名、参議院が1名。今は小選挙区制になり、全員辞めてしまいましたが、政治家の出る風土があります。私も今回で9回選挙をやりました。地元の議員の選挙に3回出て、村長選には6回目でございます。9回のうち8回は全部選挙戦でございます。たぶん最後になると思いますけれども、一番最近の選挙では無投票当選になりました。負け惜しみを言うわけではありませんが、無投票というのは投票結果も出ず、何となく寂しいというような気もする一方で、無投票くらいいいものはございません。それを一回だけ味わえたということはありがたいことと同時に、私の無投票で30数年ぶりに村長選が無投票になりました。

村を支えた養蚕

また私の村では戦中、戦後は非常に養蚕が盛んでした。養蚕というのはカイコを飼って生糸を取ることで、戦中、戦後の何も輸出するものがない時期に生糸が非常に盛んで、私どものところでは組合製糸といって、400人ぐらいの全寮制の女工さんが働いておりました。生糸を作って60キロの梱包をして横浜の埠頭まで運び、非常に景気がよい時代でした。それがア

メリカのデュポン社がナイロンを発明して、一挙に生糸の価値が下がり、現在は本当に趣味で4、5軒程度がカイコを飼っているという状態です。

そういった経緯で生糸が駄目になり、それから、昭和40年当時には、第1次産業構造改革、機械化という波にもまれてしまって、ほとんどの企業らしい企業も立ち行かなくなりました。人口もどんどん減りまして、6,400人いたのが、私の鮮明な記憶では、最終的に3,859名まで落ち込んでしまいました。

議会の限界を感じて村長に

私も田舎でそれなりの商売をしておりましたが、これだけユーザーが減ってしまっただけでは仕方ないということで、当時、村役場に散々掛け合っただけで何とかしなければ集落そのものがなくなってしまうよということを強く具申したり、私自身も自分なりに一生懸命やっておりました。当時の村役場は、そんなことはお構いなしに、国や県から言われたことをゆっくりと目的意識は一応持ちながらやっておるのが常でございました。これでは私も商売を一生懸命やって利益を上げ、それで納めた税金の使い先がこのようなものでは犯罪に等しいということで、若気の至りで議会選挙に出ました。3期務めました。議会の限界を感じて、村長選に出させていただいた次第です。最初の村長選では、特に役場の職員諸君が、あいつが出ると、どうも我々の周辺が危なくなるぞということで、すごくまとまってしまい大変な選挙をやりましたが、平成4年に村長に就任いたしました。

民間企業の厳しさを体験

就任して、まず職員に対して「全体の奉仕者として何をすべきか、ということをよく考えてやってくれ」と言いましたが、なかなか伝わらない。わかっているもやらないという状態でしたので、私も、民間企業の厳しさを体験させ、徹底してしごいてもらおうということで、職員を派遣しました。派遣先は、お隣の飯田市にあるシビアな会社で、今はホームセンターをワンフロアでやっておりますが、当時は8階建ての中で、各セクションを分けてやっているところでした。

当時61人の職員がいましたが、これを5人ずつに分けて、たった1週間ではありますが交代でそのセクションに送り込みました。朝早く7時40分までには集合し、商品の知識を頭に入れノルマを設定し、営業時

間が終われば、ノルマの達成率はどのくらいで、どこで問題があったのかということを書いて明日の朝までに書いてこいという世界を体験してもらいました。実際にこんな社会があるんだなということを彼らにしっかり理解してもらいました。

少数の体制が精鋭を育てる

そして迎えた3月には、3人が「とてもついていけない」ということで辞めていただき（今、公務員1人辞めていただくのも大変なことです）。4人が定年退職でした。一度に7人、1割の人に辞めていただきましたが、職員の中に、補充してくれという声はほとんどありません。我々がやらなければ仕方がないということで、退職不補充を繰り返して現在38名の体制でやっております。決してムチでたたき、ということではなく、職員はきっちりと目的意識や全体の奉仕者であるという自覚を持っております。そして、田舎の自治体では1人で2役も3役もやらなければいけないので、少数にすると結果的に精鋭になりました。

私は、行政は絶対難しくしてはいけないと考えており、シンプル・イズ・ベストということで、とにかく少数の精鋭たちで思いっきり仕事をしてもらっています。そうすると、小さな村なので、彼らに対する村民の評価も違ってきます。今までは8時29分に滑り込みして、5時15分にクモの子を散らすように退散しておった、あの君たちが、本当に朝早くから、夜も一生懸命やってくれているということで、だんだん評価が上がってくる。評価が上がれば、彼らもさらにやる気になります。

土木工事は地域の住民で

そうした中で、村民の皆さんにもお願いいたしました。「職員は、とにかく今、皆さんの見ておられる一生涯懸命やっておりますよ。皆さんも下條村みたいな何もない村で、何でもかんでも行政だということになると、これは生かさず殺さずのような村になってしまいますよ。何とか皆さんも知恵を出して汗をかいてください」とストレートにお話ししました。

半年ほどは、相当抵抗がありましたが、職員を減らすことを思えばたいしたことではなく、そのうち村民も「よし、わかった」ということで、堤防が壊れたら、その各集落で修復していただくようになりまして、現在、生活道路、林道、農道の工事はほとんど地域住

民にやっていただいています。村では若干の査定はしますが、材料を惜しみなく必要な分を用意します。

そうして、みんなが知恵を出し、みんなで汗をかけた後に、地区の公民館でビールでも飲んでいると最初は村長の悪口ばかり出ていたそうです。あの野郎、選挙やる前はペコペコ頭を下げたけど当選したら「これもやれ、あれもやれ」と、とんでもない話だという悪口が10分ぐらい続いた後に「そうは言っても、きれいになったな」という話になるそうです。現在22年目に入りましたが、今でも第2、第4土曜日にはどこかの集落で必ず工事をやっていただいています。どうしてもプロがやらなければいけない工事はもちろん村がやりますが、通常の工事については、何の抵抗もなく当たり前のようにやっていただきます。

隼より始めよ

まず「隼より始めよ」ということで自治体の職員が本当に歯を食いしばって一生懸命やれば、村民も知らず知らずのうちに参加する。そして、そういうことをしてくれるということになると、非常に財政的にも助かります。財政的に助かるということもありますが、それ以上にありがたいことは、村づくり、地域づくりというのは我々が汗をかいて知恵を出して協力すれば、次の日から良くなるんじゃないかということが皆さんにわかっていただいたことです。そして、積極的に村づくりに参画してもらっており、これは本当にありがたいことと思っております。こうした村づくりそのものが、村の最大の資本であり、これからも絶対手を抜かないようにやっていくつもりでございます。

節約されたお金で基金を

そうした取組みをしている中で、節約されたお金により、小さな自治体としては相当の基金ができております。これを、ある程度積極的に使い、保育料については国の基準の50%ほどですし、医療費についても高校生までは無料、義務教育の給食費も40%を補助しております。若者専用住宅は140戸ほど建ちましたが、65平米の2LDKで駐車場2台付きとなっており、家賃は月33,000～34,000円にしています。各種予防接種についても80%補助にしてほとんど無料でやっております。そして高齢化社会になってまいりましたので、75歳以上の後期高齢者の自己負担は村で半分負担しております。前期高齢者、70歳から74歳までの医療費は

30%を補助しています。

高い出生率と若年人口率

それから下水道も全部、合併処理浄化槽にしました。これが非常に高い効果があり、今の公共下水と何ら性能は変わらず、イニシャルコストもランニングコストも非常に安く上がっております。私どもの地域の町村というのは皆、下水道事業で苦勞しています。例えば下條村の場合、40～45億円と試算され、下水道の場合はこの半額補助が出ますが、あとの半額を30年間で償還しなさいというものです。30年間で償還すると、ちょうど45億円になり、補助金分がとんでしまうことになります。そこで合併浄化槽にして各家庭が責任をもって管理する形式にさせていただき、イニシャルコストもランニングコストも非常に安く抑えられました。

教育に関連することとして、中学1年生を対象とした3泊4日の海外研修のホームステイには現在50%補助をしておりますが、いずれは無料にできればと思っております。それから小中学校において、よりよい教育を充実させるため、村費で講師を3名雇用しています。そして女性生涯出生率については、国の平均が1.38から1.4ほどかと思いますが、村では2.04です。また15歳以下が何%を占めるかという若年人口率（高齢化率は65歳以上の住民の占める割合ですが）については17%台であり県下では1位です。

一生懸命使うための基金

財政（一般会計）の状況については起債残高（借金）が、交付税措置を引いた実質残額が8,859万円あります。これは払ってしまえばいいじゃないかというような額ですが、国が高い金利で昔貸しているのです、資金運用分はなかなか受け取らないという状況です。1,000兆円も借金があるのだから、これは受け取ればいいと思いますが受け取らないという、もったいないことです。

基金残高が約55億6,974万円ありまして、人口4,200人で割ると、一人あたり130万円ほどの基金があるということです。これをもう少し使わなければいけないのですが、周りの市町村が下條村ばかりいい格好するなということを、時々面と向かって言われますが。そういうことで、私どもも歩調を合わせなければいけないということで、できるだけわからないように、でき

るだけ一生懸命使うようにしております。

基金は本当に無駄なものは一銭も使わないけど、必要なものには一生懸命使いましょう、ということでやっておりますが、毎年増えております。議会は「もうちょっと使え。けちなことを言わない」と言いますが、これからリニアの時代を含めて広域の中で周りの町村とも、仲良くやっていかなければいけない一方で、いつまで、そこまで気を使えるかということで板挟みになっている悩みもあります。

将来に向けた投資を

平成24年度の決算によると、経常収支比率が65.3%です。人件費や事務費など、長期的に見れば前向きの資金ではありますが、これは要するに固定費でございます。投資的なものに回せない義務経費の割合が65.3%というのは、非常に低い率であり、将来に向けた投資として34.7%を使っている、ということを表している数字です。将来負担比率もゼロであり、今、小学校の第2体育館やプールも造っておりますが、補助金を除いた残りは全部自己資金でやっており、借金はありません。

それから実質の借金の比率を表す実質公債費比率はマイナス4.5%です。これは東京23区を含めて、全国の1742市区町村の中で4番目です。今年は3番になるかと思ったのですが、東京都の杉並区、江戸川区、鹿児島県の十島村に続き4番でした。インターネットで調べるとすべて順番が出てきます。ちなみに軽井沢といえば、皆さんもご承知の非常に健全な財政で素晴らしい町ですが、42番という順位になっています。

目的意識を持ち有機的な組織に

とにかく何もない村、そして何の特色もない村ですが、今日までで411件の行政視察に来ていただきました。視察を受け入れているような場合ではないのですが、それでもここまで日本列島が沈み掛かっているときに、ひとつでも2つでも自治体の皆さんが来て、いくらかでも勉強になればということで、やせ我慢で今やらせていただいています。視察に来る皆さんの半分ほどは「これは駄目だ」ということで帰り、残りの半分は「何とかやってみないでしょうかないな」となります。そして、また後で風の便りに聞いたところでは、その3分の1ほどが一生懸命やっているとのことでございます。

国も地方も行政組織は、しっかりとした目的意識を持ち、それが反映でき有機的に動けるような組織、そしてがんばっている人が報われるような組織に、切り替えていかなければいけないのかなと思っております。生意気なことを申しましたが、ちょうど時間でございます。どうか、田舎村長のたわ言だと思って聞いていただければ幸いです。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

地域力をいかに育てるか

～ “分かち合い” で築くかながわの未来Ⅱ～

講演 2

新しい地域自治 ～地域の課題を地域で解決するために～

平井 竜一（逗子市長）

はじめに
民主主義の実験場
“地域の自治”をつくる取組み
高度成長から低成長、成熟の社会へ
行政パワーの限界
さまざまな課題が地域に山積
新しい地域自治の仕組み
生きる基盤を地域に求める
きめ細かい対応を地域でつくり出す
住民同士のあいだに横串を
小学校区で顔の見える関係を育てる
市民がいつでも集まれる拠点を
住民自治協議会が行う3つの事業
まずはみんなが顔見知りになること
トップが直に訴えて熱を伝える
制度設計の段階から時間をかけて
全体懇話会で固める段階へ

プロフィール：平井 竜一（ひらい・りゅういち）

逗子市長

1966年生まれ。89年早稲田大学社会科学部卒業後、(株)アスクプランニングセンター入社（社長秘書・経営企画室）。98年より逗子市議会議員三期連続当選。2006年より逗子市長に就任し、現在2期目。現在、最重要課題である池子問題に続いて、市政運営に大きな影響を及ぼす重要課題として、「新たな市民自治システムの構築と長期ビジョンの策定」、「行財政改革の一層の推進」、「ゼロ・ウェイスト社会への挑戦」の3つの課題を位置付けている。



講演 2

新しい地域自治 ～地域の課題を地域で解決するために～

平井竜一（逗子市長）

はじめに

この湘南国際村の隣の自治体、逗子市からやってきました平井竜一と申します。よろしくお願いいたします。この円卓会議に参加するのは初めてですが、今回のテーマが「地域力を育てる」ということですので、逗子市で取り組んでいる地域自治について私からお話をさせていただきます。

最初に、逗子市の簡単な概略といえますか、沿革を申し上げますと、人口が現在、約5万8,000人、市域の面積が17平方キロ程度でございまして、そのうち3分の1ほどは山となっており、市街地は非常に小さくコンパクトなまちです。

戦時中は横須賀市に強制合併された時代がありました。まさに軍港市横須賀の一部として、いわゆる太平洋戦争を支えていった、そういう地の利です。それが終戦を迎えて、昭和25年に横須賀市から分離独立をするという、大変珍しい沿革のまちです。当時は住民投票を経て認められれば分離独立できるという特例法があり、そのときに当時の逗子の方々が横須賀から独立して逗子——当時、町ですけれども——となりたいということで、住民投票を起こして独立した歴史があります。それから、高度成長期には東京・横浜のベッドタウンとして人口急増期を迎えて現在に至っています。

民主主義の実験場

昭和59年前後、池子という場所にありますが、かつての旧日本軍の弾薬庫跡地——ここは米軍に接収されていたのですが——に米軍家族住宅を建設するという計画が突如起こり、これに対して賛否両論が沸き起こり、大変大きな市民運動が生まれ、市長や市議会のリコールも起きました。住民運動が本当にまさに二分され、大きなうねりになり、当時は“民主主義の実験場”とも言われました。

横須賀からの分離独立、そして、池子の米軍住宅の

問題といった背景もあり、「地域のことを地域で自ら考え、担っていく」という“市民自治”の機運、あるいは“市民意識”がとても強い自治体として今日まで至っています。

ちなみに、私は40歳で市長になり、現在7年目を迎えておりますが、この三浦半島地域は非常に若い首長が多くて、私は実は下から4番目です。確か、葉山町の山梨町長は36歳、隣の横須賀市の吉田市長は38歳だったかな。そして鎌倉の松尾市長は40歳ということで、大変まれにみる若手の首長がそろった地域です。

“地域の自治”をつくる取組み

このような人口5万8,000人という比較的小さな自治体ですが、「地域力をいかに育てるか」ということで、小学校区を単位として、地域の中での自治をつくっていくための制度づくりを今まさに進めています。いわゆる、このような住民自治協議会によって“地域の自治”をつくっていくとする取組みは、全国各地で既に始まっていますので、ご存じの方も多いかと思います。全国的な傾向として、おおよそ“西高東低”となっており、関西あるいは中京地域において進んでいるというのが私どもの捉え方です。私どもがこれを導入するときも、先進事例の調査として、大阪府池田市あるいは三重県の伊賀市、名張市などに職員が視察に行き、そこで自治体としてどのような制度をつくっているのか、あるいはどのようにそれが機能しているのかといったことを勉強しながら、逗子市での導入について研究してきました。

そもそもなぜ逗子市でこれを始めることにしたのかといえば、トップダウンです。私が市長になって現在2期目を迎えていますが、1期目のときから、いずれは、この地域でコミュニティをつくっていく仕組みや制度を構築して、地域の人たちが自分たちのまちのことを自分たちで担い、さまざまな課題解決に取り組んでいくことが、目指すべき“市民自治”のありようだ

と考えていました。そこで2期目に入り、最初にこの仕組みをつくっていくということを申し上げて、具体的な調査研究に入った次第です。

高度成長から低成長、成熟の社会へ

私がこのように考えた時代背景として、大きくは2つのことが挙げられます。

まず、特に阪神淡路大震災以降ですが、ボランティアが非常に大きく私たちの意識の中に根付き、そして地域の中でのさまざまな活動が本当に活発になってきたことです。それはおそらく全国どの地域においても大きなうねりになっているのではないかなと思います。そういった市民の活動、市民参加、協働といったことが本当に当たり前のようになつて、これこれ20年近く経ちますが、そういった地域との関わりを大切に市民の意識が高まっているということがひとつ挙げられます。

それからもう一つは、日本社会全体が人口減少あるいは少子高齢化になり、経済的な側面でいえば、いわゆる高度成長から低成長、成熟の社会に移行してきていること。そして、そういう中で、当然、市の自治体の財政も大変厳しいというのが、まさに私たちが直面した大きな課題でもありました。先ほど経常収支比率が65.3%という下條村の数字を聞きまして、何とやらやましいことかと。逗子市は、比較的所得の高い人の住んでいる割合が高いまちではありますが、経常収支比率は97%前後ですから、65%というのは本当に驚異的な数字です。ちなみに逗子市はおおよそ170億円ぐらゐの年間の一般会計予算ですが、現在、地方交付税交付団体で12億円ほどの交付税が国から配分されています。どこの自治体も大変財政が厳しい、あるいは行財政改革の中で職員の削減というものが本当にぎりぎりのところまで削って、何とか自治体運営をしているという状況です。

行政パワーの限界

このような、“背に腹は代えられない”行政的な背景もあり、これから先、自治体が担っていける行政サービスは俗に言うナショナルミニマムを支えていくことで、ある意味精いっぱいというのが現実だと思います。生活保護の受給者の増加であるとか、あるいは生活を維持していくためのさまざまな機能が低下してきています。たとえば虐待相談だけをみても、毎年のよ

うに相談員を1人ずつ増やしていかなければ対応できないといったような状況で、本当に多様化した市民あるいは社会のニーズに応じていくという部分がますます肥大化して、それがまさに経常収支比率という固定費の上昇につながっている状態です。

ですから、その意味では、本当に暮らしやすい地域にしていくためには、行政だけのパワーではもう限界が見えており、その中で、でも、この地域に住むからには、より人々が夢を描き、あるいは希望を持って豊かなこの地域社会を営んでいくことを実現するためにはどうすればいいのだろうか、ということが共通の問題意識にならざるを得ないと思います。

そのときに、では、そもそもの“自治”とは何だという観点からいくと、行政だけがその地域の課題を解決するという時代は終わったと。地域の人々が自ら自分たちにできることを自分たちで取り組み、解決していくというコミュニティを目指していくことが、これからの日本社会の本当に大きな課題だと捉えています。そういった問題意識のもと、では逗子市としてはどのように取り組んでいこうか、といったときに、小学校区という一つの地域の単位を自治のエリアとして、そこで地域の住民が連携をして、自ら取り組んでいく制度と仕組みをつくりたいと考えた次第です。

さまざまな課題が地域に山積

さきほど逗子市の人口は5万8,000人と申し上げましたが、人口減少社会を反映して、統計学上の人口推計では、約30年後には4万7,000人強と、現在より1万人ほど減ることとなっています。これはおそらく日本全体が同じ傾向にあり、1億2,000万人が9,000万人に減るというのと比例して、逗子市もそうした推測が出ています。そして高齢化率（65歳以上の人口の比率）についてですが、2013年現在で、逗子市は既に29.4%ほどですが、2040年には44%を超えるだろうという予測が出ております。44%ですから、およそ2人に1人が65歳以上という社会はいったいどのような社会になるのだろうと感じています。既に、山間部の町村等では40%を超えている自治体もあるとは思いますが、都市部でも既にそういった局面に入りつつあるということです。

したがって当然、生産年齢人口が減り、税収は相当減らざるを得ません。そうすると、44%を超えるであろう65歳以上の人たちをどのように支えるのかという課題は、まさに行政のマンパワーや財政力だけではと

うてい立ち行かないということが、この数字からも一目瞭然です。

そしてまた、現在の社会では、一人暮らしの高齢者の増加、子育ての孤立化、災害時の不安、市民ニーズの多様化、そして地域への関心の低下や、地域のつながりの希薄化など、さまざまな課題が山積しています。あるいは町内会や自治会、そして子ども会などの組織でも、なかなか役員の担い手がいけません。役員をやりたくないから子ども会に入らない、ということで、子ども会がひとつ二つとなくなっていく。そうすると本当に、どうすれば地域の中で子どもを育てるのかということが大きな課題となります。

新しい地域自治の仕組み

ちなみに逗子市の自治会の組織率については、9割の地域から4割程度の地域までさまざまです。商店街を含んだ中心市街地のエリアでは、なかなか自治会組織ができない、あるいは組織されていても加入率が低いという傾向にあります。その周辺で、比較的つながりが強い地域では、まだ8割前後の自治会の組織率のところもあります。都市型の地域では、自治会の組織率が低くなっているか、あるいは組織化されていたとしても、実際の活動がどこまで活性化しているかは別の問題となります。ただ先ほど申し上げましたように、逗子市では、市民の参加やさまざまな協働の取り組みがこの20年ほどの間で本当に活発になってきました。そうした実績と、これも先ほどお話ししたように、緊縮財政という社会経済状況があり、そうした背景を踏まえて、新しい地域自治の仕組みを導入し、安心・安全の地域社会づくり、元気な地域づくりを目指していきたいと考えています。

さらには、もう一つ言いますと、かつて高度成長のときには、日本人のライフスタイルはいわゆる終身雇用によって支えられていました。企業に入れば、収入が安定するだけでなく福利厚生も充実し、ある意味、その人の一生にわたり安定した社会生活が保障され、そうした夫が働き、妻が子育てをするという社会構造となっており、この間、高度成長で豊かな暮らしを築いてくることができた。ところが、まさに冒頭でグローバル化というお話がありましたが、まさに日本経済がグローバルな中で勝ち残っていかなければいけない。昔はいわゆる大企業に入れば一生安定した将来が描けたけれども、そうした厳しい経済環境になったときに、今や一部上場企業であったとしても将

来を約束されない、というような社会生活の基盤が非常に不安定になってしまいました。

生きる基盤を地域に求める

したがって、人間がどこに帰属して、その安定感や安心感を得ながら人生を送るか、と考えた時に、終身雇用制度が崩れ、これまでのような存立基盤が非常に弱い社会では、やはり戻るべきは地域であり、その地域の中でつながりや人間関係となるでしょう。こうしたものをもう一度見直していかないと、自分たちの心の安定や、あるいはアイデンティティといったものを感じながら生きていくことのできない社会になってしまうのではないかということが、社会的な背景の一つとして指摘しておくべきことかと思います。

阪神淡路大震災や東日本大震災といった危機を経て、地域のつながりが意識されるようになっていますが、その根っここのところ、おそらく今申し上げたような、いわゆる企業社会が担ってきた人々の暮らしの安定みたいなものが非常に揺らいでいる中で、自分たちの生きる基盤をどこに求めるかという意識が、こころの奥底で働いているかと思っています。ですから、若い世代だけでなく、30代、40代でも、地域の中で何か関わりたい、という意識が、非常にここ数年、芽生えてきていることを実感としてとても感じています。

きめ細かい対応を地域でつくり出す

そういうことも大きな社会的な背景としてあげられる中で、では、そうした人たちの意識や、あるいは行動がそこに醸成されていくような器、制度や仕組みをどのように地域に用意するのか、ということが、自治体にとって今、直面している非常に大きな課題だと私は感じています。そこで、逗子市としても、この新しい地域自治の仕組みとして、(仮称)住民自治協議会をつくらうという方針を出しまして、地域社会をある意味、再構築して、自分たちのまちを自分たちでつくっていくと、そして元気な地域をみんなでつくっていきましょうという仕組みをスタートさせました。行政の役割はある意味のナショナルミニマムに限定されていくなかで、その仕組みのねらいとしては、より多様化した地域の課題に応じて、きめ細かい対応を地域の中でつくり出せるようにすることです。

わかりやすく言えば、本当にちょっとした困りごとを地域の中で支え、支えられて、お互いさまの関係や

助け合いをより促進していくための仕組みです。昔だったら、ご飯が足りなかったら「ちょっとご近所さんにお米を借りてくる」ようなことがあったでしょうが、今はそういうことがやりにくい時代であるとするならば、何か新しい仕組みや仕掛けをつくらなければ、そういった人間関係は再構築できません。そのための仕組みです。こういうかたちで地域コミュニティを再構築することで、人びとのつながりをさらに強めて、地域の中での支え合いの社会をつくっていくことがまさに大きなねらいです。

住民同士のあいだに横串を

行政は縦割りですので、例えば老人クラブ連合会と市の福祉部のあいだでは、要望が出され、それに予算をつける、あるいは補助金を出す、というかたちでの関係がある。また商店会にしても、市の経済観光のセクションに対し、いろんな政策要求をして、それをもとに予算化されたり補助金を出したりという関係性がある。市民、市民団体の行政との関わり方もまさに縦割りになっている。そうすると、意外に隣の団体が何をやっているのかは知らなかったりするという現象が、おそらくこの地域でも大なり小なりあるのではないのでしょうか。そこで、小学校区を地域の単位として、この（仮称）住民自治協議会という仕組みで、住民同士の横串を刺していこうとしています。地域にある、自治会・町内会が中心であることはもちろんですが、あらゆる団体、あるいは個人もそこに参画して、地域の課題を一緒に取り組んでいこうとするものです。

小学校区で顔の見える関係を育てる

逗子市の人口は先ほど 5 万 8,000 人と申し上げましたが、市内には 5 つの小学校があります。単位となる小学校区の人口は多いところで 1 万 6,000 人、そして 1 万 3,000 人、1 万 2,000 人、9000 人、もっとも少ないところで 6,100 人の人口が小学校区ごとにお住まいになっているということなので、ある意味、要するに町村の人口規模となっています。全国の自治体の中には、中学校区を単位として一つの協議会組織をつくっているところもあります。あるいは、かなり大規模な人口の自治体では、行政センター区域を単位として、それを中心にシステムをつくろうという自治体もあります。

ただ、実際にやっている中での私の感覚としては、

まさに子どもが歩いて通って日常生活を営む、小学校区の地域が、小学校という大きな公共施設を一つの核にして、地域がつながっていき、顔の見える関係ができていくというのがサイズとしてはふさわしいのではないかなと私は考えています。

市民がいつでも集まれる拠点を

これは後でも触れますけれども、実は小学校区でも大きいという議論があります。ただ、例えば災害のことを考えても小学校は避難所になります。毎年、避難訓練を地域でやっていますが当然、大人から子どもまで小学校に集まって、訓練をするわけですね。そういった災害における相互扶助を考えたときにも、小学校は一つの大きな拠点であり、小学校区は地域のまさに核として機能すべきサイズではないかと実感しております。

そうした考え方の下に、小学校区を単位として、さまざまな団体の人たちに集まっていただき、地域の課題は何かというところから議論を始めて、では自分たちは何を優先的に取り組んでいくのかということを含めみんなで話し合ってもらうような協議会を組織しようと考えています。そして、地域の中核的な住民がいつでも集える場、俗に言うコミュニティセンターを小学校区に一つは設けます。現在、公民館が逗子市には 2 か所あります。公民館がない小学校区には、もう少し小ぶりの地域の活動センターがあります。ですから、この制度を導入するときには、公民館は廃止して、地域の活動拠点、いわゆるコミュニティセンターとして、住民が自由に使える、使い勝手のいい施設に移転しようという話もしています。とにかく市民がいつでも集まれる拠点も必要だということで、これを制度の一つのポイントとして捉えています。

住民自治協議会が行う 3 つの事業

では、住民自治協議会が設立されたら、具体的に何をやるのかということについては、3 つの事業に整理をして、市民の皆さんに説明しています。まずひとつは「自主事業」。これは、まさに読んで字のごとく、自分たちでこれがやりたい、これが必要だということを企画してやってもらう事業。

2 番目に「共通事業」。これは、全市的な共通の課題だから、市として、どの地域でもやってほしいという事業。例えば、避難所運営委員会の防災訓練、あるい

は地域に行く时必须が一番プライオリティの高い課題はごみですから、ごみの減量化や資源化、あるいはごみステーションの管理などをどうやればもっとうまくいくのか、といったようなことです。もちろん、それを皆さんと議論しながらこれから決めていきたいと思います。

最後の「選択事業」とは、行政がメニューをつくり、そのメニューにある事業をやる場合には、財政的あるいは人的な支援をしますよ、というもの。言わばヒモ付きですね。国が補助制度をよくつくりますが、逗子市としても推進したい事業のメニューをつくり、それをしてくれるのであれば、やった分だけ補助しましょう、ということです。そういった選択事業をつくって、地域の皆さんにいろいろと活動を促していこうと考えています。

まずはみんなが顔見知りになること

財政的支援について具体的にお話しします。「地域包括交付金」と言っていますが、これは国と地方との関係においても、ヒモ付き補助金を「どうぞ自由に使ってください」と用途を定めない包括交付金にする、という議論がありますが、この包括交付金と一緒に。現在、さまざまな団体に縦割りで補助金を出していますが、こういう壁を取っ払い、ルールを作って、包括的にまとまったお金を地域に配分しますから、あとは地域の中で決めてくださいと、というかたちでの財政的な支援を今考えようとしています。人的な支援に関しては、行政に小学校区ごとの担当の職員を任命して、行政内部とのパイプ役となったり、地域の多様な相談を受ける体制もつくろうということを議論しています。

ざっと今お話しした制度は、他の自治体でやっている地域自治の制度とおおよそ一緒だと思います。ただ、交付金の金額が自治体によっては1,000万円をば一んと出しているところもあれば、100万とか200万という自治体もあります。逗子市は、最初からニンジンをぶら下げて、ば一んと出すのはあまり好ましくないということで、30万円ぐらいから始めて、徐々にやっていこうと考えています。まずはみんなが顔見知りになって、何をやるのかということから始めて、いわば、小さく生んで大きく育てようとしています。

トップが直に訴えて熱を伝える

この仕組みを立ち上げるために、この1年ほど地域を回って説明会を重ねました。30回ほどやっていますが、その8割ぐらいは私が自ら行っています。とにかくこの仕組みは、住民にとってはあまり評判が良くない。まずは、「行政がやっていることを俺たちにやらせるのか」と、そこから入ります。なので、さっき前段で申し上げたようなことを、もちろん簡潔に市民のみなさんにわかるように説明をします。

ある意味、その熱を伝えないと呼応してくれないので、それはもうトップがやるしかないということで、自治会をはじめ、いろんな団体のところとにかく自ら出向いています。そして、この仕組みがなければ将来40%を超える高齢化率のまちをどうやってみんなで支えていくんだということを30分ぐらい熱弁を振るい、直に訴えるということをここ1年ほどやってきました。

制度設計の段階から時間をかけて

ようやくそうした危機的状況が何となく理解されるようになる一方で、「でも何か新しいことをやらされたら、また俺ら負担が増えるな」という葛藤を抱えている中で、まずは制度をどうやったらつくれるかという議論をスタートさせるために、各学校区に懇話会の場をつくりました。懇話会には、地域の自治会や、民生委員、PTA、子ども会などから代表の人に集まっていただいて「どういう制度だったら自分たちがやれそうか」「どんな課題があるのか」というところから議論をしています。

制度設計の段階から、これだけ時間をかけているのは、おそらく他ではあまりないかもしれません。最初はさきほど申し上げたように「行政のやるべきことを俺たちに押し付けるのか」というところもあったり、あるいは「お金を配分なんかしたら、地域で分捕り合戦が始まって対立構造が生まれるのではないか」とか「こういう協議会をつくったら、今でも自治会の連合会があるのだから屋上屋じゃないか。それはどうやって整理するんだ」とか、また時には「誰が代表なんだ。地域のボスはお前だ」「いやお前だ」というやりとりなどもあり、相当いろいろな議論が錯綜しました。

でも1年ほどやってきましたが、地域のペースには、その時間が必要なんです。ようやく何となく連携してやれることからやればいいんだから、というような意識が徐々に芽生えてきて、少しずつみんなが同

じ方向に向いて歩み始めたかなという感じです。

全体懇話会で固める段階へ

そして現在、全体懇話会を始めています。この全体懇話会で、各小学校区の懇話会に入っていた方の代表として2、3名ずつが集まってもらって、今度は全市の制度を最終的にどのようにしようかという議論を進めています。これがおおよそまとまれば、市民説明会、パブリックコメントを経て、来年の1月ぐらいにようやく逗子市としての制度が固まり、2月以降、小学校区で準備会が立ち上がるところから順次始めていくという段階までようやく来ました。この間、2年ぐらいかけています。それでも準備会の段階にすぐ移行できるところと、「いや、まだまだちょっと時間がかかるよ。半年、1年、自分たちのペースでやらせてくれよ」というところもあり、この逗子の小さいまちでもまさに各地域によって温度差があります。「もう、すぐ公民館を俺たちにやらせてくれ」というところから、「誰がそれを担うのか」というところまで、本当に千差万別です。

そういったプロセスを経て、今逗子がまさにこの11月に全体懇話会で制度を固めるところに到達したという状況にあります。来年度以降、協議会が立ち上がり、「じゃあ、俺たちの地域でどんなことをやろうか」という議論がまさに始まろう、という段階に来ていますので、今後の取り組みにも、ぜひともご注目いただきたいなと思っております。以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

地域力をいかに育てるか

～ “分かち合い” で築くかながわの未来Ⅱ～

基調講演

生きている共同体とは何か ～関係を生み出す社会デザインを考える～

内山 節（哲学者）

はじめに
未来に支えられた現在
修験道的な救済とは
伝統的な共同体から学びなおす
自然と生者と死者の共同体
海にとっては一つの波動
亡くなった人たちと社会をつくり直す
自治の能力を持っている地域社会
これからも無事を祈る山の神信仰
機能だけでなく祈りでつながる家族
共同体は地域の一つの結合組織ではない
助け合いがしやすい重層的な共同体
小さい共同体を積み上げていく
労働力と生産物で助け合う農村社会
お金で助け合う都市部のコミュニティ
無条件で助け合うという精神を
出資金は返済せずに次の事業に
出資で自分たちの生きる世界をつくる
生きている世界を基盤に社会をつくり直す

プロフィール：内山 節（うちやま・たかし） 哲学者

1950年東京生まれ。哲学者。立教大学大学院教授、特定非営利活動法人森づくりフォーラム代表理事など。存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思想を展開する。1970年代から現在でも、東京と群馬県上野村との往復生活を続けている。上野村では畑を耕し、森を歩きながら暮らしている。主な著書に『文明の災禍』（新潮新書）、『怯えの時代』『「里」という思想』（新潮選書）、『共同体の基礎理論』（農山漁村文化協会）、『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書）、『清浄なる精神』（信濃毎日新聞社）など多数。



基調講演

生きている共同体とは何か ～関係を生み出す社会デザインを考える～

内山 節（哲学者）

はじめに

私、生まれは東京の世田谷区ですが、20歳ぐらいのときに群馬県の上野村に魚釣りに行きまして、大変気に入ってしまい、それ以降、上野村にいたり、東京にいたりという生活をしています。先週も、山形県の羽黒山から知り合いの修験者というか山伏さんが上野村にやって来て、もともと上野村も山岳信仰の村ですので、友人たちも呼んで一緒に10人ほどで上野村の岩山に登りましたら、すっかり風邪をひいてしまいました。村では、家庭菜園程度ですが、一応200坪ぐらいの畑と、1ヘクタールぐらいの山があって、そのあたり全体を使いながら暮らすというのが僕は大好きです。

上野村は人口が今1,400人程度で、高齢化率は40%ですが、村は大変元気です。1,400人のうち、だいたい250人ぐらいがIターンの人たちですので、外からたくさん人が入ってきています。

また、ちょっと僕らとしては面白くないところもあったのですが、市町村合併に巻き込まれるのではないかという読みで、90年代に、村の奥の方に揚水発電のダム建設についてオーケーを出しました。一応、工法にはずいぶんと条件をつめました。うちの村にはダムが好きな人はいませんが、人口1,400人ですから村として維持していくために財政力をきちんとつけておかないといけませんので。

そういうこともありまして、財政事情は大変良い村です。村の年間予算の3倍ぐらいの預金——基金ですけども——を持っている状況です。うちの村の浄化槽は戸別浄化槽にしているので、もしかするとそれも、財政状況に寄与しているのかもしれない。

未来に支えられた現在

そういう村にいて、今日は「共同体とは何か」という話をしてみようかと思っていますが、初めに申し上げたいのは、過去、現在、未来という言葉についてで

す。私たちは一直線の線上に終わったところに「過去」があつて、今のところに「現在」が、先には「未来」があるという、矢印のような感じで、過去、現在、未来という捉え方を当たり前のようにしますが、よく考えてみると、この捉え方は極めて近代的なものです。近代以前というか伝統的な捉え方は、おそらくこういうものではなかっただろうという気がしています。

図にするのは難しいのですが、あえて図にしてみれば、ドーナツ状の輪が3つあるとでも思ってもらえばいいでしょう。一番外側の輪に「過去」があり、その内側に「現在」という輪があつて、その真ん中に「未来」という輪があるというように考えた方がいいのかなと思います。

どういうことかという「現在」というのは、「過去」に支えられた現在であり、あるいは現在があるから過去が見えてくる。だから、もし現在がなければ過去は見えないわけで、それは人間たちにとってみれば存在しないということと同じなわけです。「未来」もまた同じで、現在があるから未来が見えている。実は未来というのは、それ自身としては存在しない。なぜなら、未来とは現在にならない限り現実には出てこないわけです。だから、明日というのはありますが、明日の状態で明日はないということですね。だから、明日が現在になったときに明日がある。そうすると、その明日というのは、もしかすれば、もう一遍巨大な地震が起きている明日かもしれないし、あるいは原発がさらに抜き差しならないことになっている明日かもしれないし、逆にもっともっといい方向が見えてくる明日かもしれませんけれども、とにかく未来のままで未来はない。

結局、現在があるから未来が見えているし、現在があるから過去が見えている。それは逆に言うと、過去に支えられて現在があるし、未来に支えられる形で現在がある。我々は未来を感じることによって、だから今どうしようという発想が出てくるわけです。これはやはり未来に支えられた現在と言ってもいいというこ

とです。

だから、時間の経緯ではなくて、現在というものを考えていくときに、どこに過去があって、どこに未来があるのかという、そういう捉え方がおそらく伝統社会の人たちの過去、現在、未来だろうという気がいたします。

修験道的な救済とは

冒頭で羽黒山の山伏さんと一緒に山を登ったとお話しましたが、今度の福島原発事故に対して、修験道系の人たちはかなり今回の事態には皆さんまとまって怒っています。なぜかと言うと、自分たちの神様である自然に対して放射能を振り掛けるとは何事だ、ということなのです。

この修験道的な世界の考え方の一つとしてあるのは、今度の福島の事故が起きた後でも、それぞれのお寺で救済のための祈りをしていました。そのときに修験道の場合、どのように祈るかといえば、過去の救済と現在の救済と未来の救済を仏に頼むというかたちを取ります。僕はちょっとびっくりしたのですが、現在の救済と未来の救済だったら頼みがいいがあるかもしれないけど、過去というのは終わったものだから、今さら救済してくれと頼んでもどうにもならんだろうと思うのですが、修験道的世界では、過去救済をとっても重要視します。それはなぜかという、過去があるから現在ができてしまっているわけで、過去をもう一遍救済し直さないと現在が修正できないということです。

それは、福島原発事故でいえば、原発を推進してきた過去です。それは単に原発を推進した人たちというだけではなく、こういう時代を迎えていった私たちの戦後社会において、さまざまな問題があるわけで、そこをどう修験道的に言えば、どう「救済」するか、ということです。そこを救い出さないと、実は現在救済も未来救済もできません。そこで、その3つの時代の救済を祈るというのが修験道的な救済の論理でもあります。そこにあるのは、過去と現在と未来という時間的変異ではなく、現在形の中に埋め込まれているものとして過去があり、未来があるという捉え方だと思っていただければいいかと感じています。

伝統的な共同体から学びなおす

そういう視点で、コミュニティや共同体を考えてい

きますと、私たちは、伝統的な共同体から学びなおすしかないという気がしています。つまり現在において、どうしようかというときに、その背後にある過去を学ぶ。そのことによって、今度は未来をどうしようかということを考えながら現在を考えるという、いわば“同時性”といったようなものを捉えるしかないのかなという気がしています。

そこでまず、伝統的な共同体とは何だろうかということですが、実はこれは大変難しい問いです。なぜかと言いますと、おそらく時代によっても違うし、それから場所によっても違う。例えば私のいる上野村ですと、水田を一枚も持たない山村です。水田が一枚もない村というのは日本の中でもかなり珍しいのではないかなという気がいたしますが、いわば歴史的に存在しないという村です。ですから、昔の主要な産業は養蚕、あとはコウゾを植えて和紙を作るというのが主要な産業でしたが、その後、一時期、非常に優良なコンニャクイモが採れましたので、コンニャクが村を支えたという時代を経て、今はキノコの生産が中軸になっています。こういう村と、広い水田地帯を持つ村とでは、考え方はずいぶん違います。

また位置的に言えば、上野村は片側に山を越えると長野県、もう一方の片側に山を越えると山梨県という、群馬の中では最南端あるいは最西端と言ってもよいような場所に位置しています。気象的には東京と似ており、東京が晴れていればこちらでも晴れているというような気候です。冬になりますと、東京で雨が降っていても、村では雪になっていることはありますが、もともとあまり雪が降りません。寒くはなりますから凍結するということはありますが、雪が深く、50センチも1メートルも積もるということはまったくない場所です。同じ群馬県でも、北へ行きますとスキー場があるように、1メートル、2メートル積もることになります。

一言で共同体といっても、豪雪地帯の共同体と、上野村のように雪の問題があまり発生しない地域の共同体では、かなりいろんな点で考え方も違いますし、自然の恵みにしてもずいぶん違ってきます（例えば山菜類などは豪雪地帯の方が圧倒的に恵まれています）。さらに言えば、海岸地帯ではまた違ってくるでしょう。つまり共同体と言いつつ、どれをもって伝統的共同体と言うのかというのは実はよくわからないのです。その上、同じものがずっと何百年も続いたわけではないでしょうから、やはり歴史の変容もあります。ですから、実はよくわからないなかで私

たちは伝統的共同体という言葉を使っています。

自然と生者と死者の共同体

ただ結局、何が重要かと言うと、先ほどの過去、現在、未来の関係です。今、私たちが現実の中で突き当たっている問題を考えていくときに、どのような過去の共同体の姿が見えてくるのか。それが、いわば伝統的共同体であり、例えば私がいる上野村のように、一面では壊れつつある部分もあるかもしれませんが、結構まだ生活領域の中にしっかり残っている共同体の姿であると言ってもよい気がしています。

日本における「伝統的共同体」という言葉をそういう意味で使う際に、日本との比較値がないかということで、フランスを使ってきた経緯があります。私の場合、きちんとした調査に行っているわけではなく、年に一遍ぐらい、ちょっと遊びに行っている、という感じですが30年以上続けてきています。初めて行ったのは30歳ぐらいでしたが、もともと釣りが好きな人間なので早速、セーヌ川に釣りに行きましたが、ちっとも面白くありません。でも暇があると、農村に行ったり、山村に行ったりして、一番好きな場所はピレネー山脈のあたりです。

向こうでも地方に行きますと、とてもいい村があります。ただ、日本の村と向こうの村は根本的に違うと思っています。それは景観が違うとか、作っている農業の仕方が違うとか、いろいろありますが、私から見えて一番大きい違いは向こうの人たちの社会観です。向こうの人たちの社会観は、“生きている人間たちの社会”だということです。生きている人間たちの社会ですから、例えば「自治」といった場合に、“生きている人間たちがよく議論をして、自分たちのルールを決めて、実行に移せばいいということで非常に簡単です。もちろん、これは実際にやろうとしたら大変なことで、生きている人間たちの意見をまとめること自体がいろんな困難を伴いますが、原理的には、生きている人間の社会だから、生きている人間たちがルールをつくれれば「自治」ができるということです。

ところが日本の社会では大変面倒くさい。なぜかと言いますと、社会観が違うのです。日本の社会では、まず自然と人間の社会である。つまり自然は社会の構成メンバーであって、人間といわば対等の資格を持っている人たちだということです。それから、もう一つは、人間と言った場合に、生きている人間だけによって構成されているわけではなく、死者もまたこの社会

の構成メンバーであるというのが伝統的な社会観としてある。だから、言葉で言うと“自然と生者と死者の共同体”というのが日本の伝統的共同体です。

海にとっては一つの波動

この問題は今回の東日本大震災が起きて、やはり重要な問題だなということがわかってきました。というのは、三陸に私の知り合いたちもいたのですが、あの震災の後、数日後には力強いメッセージを出したのはやはり漁民たちだったという気がします。漁民の人たちは海岸端に住んでいますから皆さん大被害を受けました。大変な状態ではありましたが、ただ比較的早い段階から「大丈夫だから」「やっていけるから」というメッセージをくださった。もちろん大丈夫な状況ではなかったですから、私たちもできるだけの応援をしていくという姿勢でしたが、むしろ向こうから「大丈夫だ」と言われた。

なぜあんな状況で「大丈夫だ」と言えたかという、彼らは海が無事であることを知っていました。海が無事、つまり自然が無事である。つまり、津波は人間にとっては大災害だけど、海にとっては一つの波動に過ぎなくて、そのことによって海はまったく破壊されていない。それから三陸地域では昔から、津波の後、海はもっと良くなるという伝承があります。そのこともありまして、彼らの実感としても海は大丈夫だ、と。ということは「われわれの社会は、半分は壊れていない。壊れたのは人間領域だけ。だから、その半分が壊れていない以上、もう一度再建できるから大丈夫だ」というメッセージをいただいた。しかし、人間領域だけと言っても大変なことです。我々としてもできることはしなければとは思いましたが。

そういうことがあり、「この社会は自然と人間の社会だ」ということを知っている伝統社会の人たちの持っている力強さと、それを忘れざるを得ない生活をしてきた人たちの弱さが、今回かなりはつきり出てきたという感じがいたしました。

亡くなった人たちと社会をつくり直す

それからもう一つは、当然ながらたくさんの方が亡くなっているので、亡くなった人たちとどういう関係を取り結びながらこの社会をつくり直すかという問題に精神的な決着がつかないと、前に歩けないということもたくさんあった。つまり、亡くなった人たちがも

ちろん生き返るわけではないのですが、亡くなった人々と私たちはどういう関係を結びながらこの社会をつくっていくか、ということにどうやって折り合いをつけていくか。つまり、実は亡くなった人たちが関係者として存在するという、伝統的な社会観では、死者との関係の取り結びの問題は今回も大きい問題としてありました。

今回は、宗派の枠を越えて、さまざまな宗教関係者の人たちがボランティアで行き、供養したり、お葬式をあげたり、今でもたくさんの人たちがやってくださっている。亡くなった人たちがこの社会にどういうかたちで関係者として存在しているのかという、この問題はとても重要だったということです。

自治の能力を持っている地域社会

ですから、私たちの社会は、伝統的な自然と生者と死者によって構成されるというものがどこかにある。そういう中で共に生きようとするのが共同体ですから、「自治」も大変面倒くさくて、自然の意見も反映しなければいけないし、死者の意見も反映しなければいけないということになってくる。そうすると、日本の伝統的な自治において非常に重要な役割を果たしているのは祭りや年中行事です。つまり祭り（正式には祭礼と言ったほうがいいのでしょう）や年中行事を通しながら、私たちが自然とどういう関係の下で生きているのか、死者とどういう関係を持ちながら生きているのかということ、絶えず生きている人間たちが再確認する作業が必要です。

それを通してながら、結局、生きている人間が自治するしかありませんが、しかし、生きている人間が生きている人間の論理だけで開き直ってはいけません。絶えず、いわば自然の代弁者でもあり、死者の代弁者でもあるという役割を果たさなければなりません。こういうかたちで行われているから、日本の地域社会は、今でもそうですが、祭りや年中行事が生きている地域社会は、自治の能力を持っているし、それから、そういうものが崩壊してしまっている地域になると、非常に大変なことになるということがあると。私の村も過疎地域ではありますが、そういう過疎地域でも祭りとか年中行事が維持できている限りは村の維持ができる。ところが、集落によっては、もう祭りとか年中行事が維持できないでいる地域もあるわけで、そうなってくると、非常に厳しいことを想像せざるを得ない。

また、例えば新興住宅地などでも、もう少しまともな地域社会をつくろうよという動きが出てくると、たいてい祭りをやろうという話から始まります。新興住宅地の祭りというのは神様のいない祭りですが、でも祭りが何かの結集軸になっていくという思いは無意識のうちに伝統社会から受け継いでできているのだらうという気がいたします。

これからも無事を祈る山の神信仰

そういう社会で絶えず必要になってくるのが、いわば人々の祈りの共有という問題です。例えば私が上野村にいと、つくづく宗教とか信仰という言葉は明治の翻訳言語だなということを本当に思い知ります。実際あれは明治の翻訳言語で、伝統的な日本語には宗教もなければ信仰もありません。というのは、上野村には、例えば今でいう山の神信仰とか、水の神信仰とか、そういうものがたくさん存在する。だけど、それは自分たちの山の神に対する祈りだったり、水の神に対する祈りだったりするだけであって、まったく宗教性を持たないし、あるいは信仰集団でもありません。

僕は山の神信仰は大好きです。なぜかと言うと、村にいと、山の神に対する祈りが大事だとみんなが思っており、僕も自然にそう思うようになる。だけど、山の神信仰というのは、私も気に入ったので入れてくださいと言っても、登録する場所も年会費もないし、だから脱退することもできないし。つまり組織形態が何もありません。ただ山に山の神が祭られています。山の神の大祭のときには、行く人がいて、お参りをするという、あるいはお供え物をするというだけであって、それをつかさどっている神社とかお寺のようなものさえないといひます。

つまり人々が山の神に対する祈りを捧げ続けたという、それだけで1,000年以上にわたって継続されてきている。本当に説明しにくい信仰です。そういうものが村にはたくさんあります。そういうものを共有しながら、実は山の神に祈る、水の神に祈る。それはまた、この自然と人間の社会のあり方に対する祈りでもあり、それが続いていくことを祈るといひますか、つまりこれから先も無事であることを祈る。これから先も無事であることを祈るのは、今、自分たちが何をしなければいけないのかということを考えること。そういう営為によって続いてきたのが山の神信仰です。

機能だけでなく祈りでつながる家族

ですから、おそらく伝統的な共同体社会は、本当に持続させていくためにはみんなが何に祈るか——宗教でも信仰でもないような、本当に祈りの共有——ということが大切になってくるのではないかと思います。それは、例えば一番小さい共同体としての家族を挙げてもいいでしょう。家族は機能だけではなく、実は祈りによってつながっています。なぜかと言えば、機能だけでつないでしまうと、例えばお父さんは働いてお金を持ってくる人、お母さんは家で家事その他をやっている人、そんな機能分担をしてしまったら、おおよそその家族は破綻してしまう。

そうではなくて家族とは、例えば「子どもたちが元気に育つように」とか「将来無事に暮らすことができるように」とか、逆に子ども自身が大きくなってきたら「お父さん、お母さん、いつまでも元気でね」といったお互いの祈りのようなものが基軸になってこそ家族という共同体であり、それが機能的なものだけ議論してしまえば、実にいつ崩壊するかわからないようなものになってしまう。

今の日本の社会は、本当に人間がばらばらになってさまざまな問題を起こしている時代ですから、そこで機能的にももう少し結び直そうという議論が起きるのは当然で、私自身はそれを何ら批判する気はありませんし、大事なことだと思っています。ただ共同体や本来のコミュニティは、家族と同様に、それとは違うと思っています。なぜなら、機能論では語ることでできないもの、機能論を超えたところにあるべきものであり、その共同体には「この地域が永遠に無事であってほしい」といった祈りとしか言いようがないようなものが生まれてくるでしょう。

だから、地域社会を機能だけで説明をつけてしまうと、さきほどの家族の例のように、誰が金を取ってくるんだと、誰が家事をやるんだ、という機能分担的な家族論になり、とても殺伐としたものになります。ただ、今は機能という面だけでも議論しなければならないほど、とんでもないところまで来ているという時代であることは十分にわかった上で申し上げていますが、それでも最終的な着地点は、それを越えなければいけないという気がしています。

共同体は地域の一つの結合組織ではない

それから、もう一つ、伝統的な共同体といったとき

に、日本の共同体論はある誤解をしてきたという気がしています。それは多分に大塚久雄さんの責任でもあるのですが、かつて大塚先生が書かれた『共同体の基礎理論』という本が日本のこの問題のテキストとして1960年代ぐらいまで有効でした。その大塚さんの共同体論が、ヨーロッパ的共同体論に基づいた文献研究で断罪してしまったという問題があつて、長らくその世界から抜け出すことができなかったと。それは彼の封建的共同体像という問題もありますが、僕から見ると非常に大きい問題点としては、共同体が地域の一つの結合組織だと思っているということに根本的な間違いがあると思っています。

例えば、私は、上野村という日本の中では共同体的雰囲気色が濃く残っている村に半分いますが、上野村の共同体はどうなっているかといえば、実は小さい共同体の集合体です。つまり、例えば、まず集落には集落という共同体がある。だけど、集落共同体が全てかというとなんかそうではなく、江戸期の村ぐらいの自然村ぐらいの範囲の共同体は今でも有効に残っているし、それから上野村も明治以降、合併していませんので、上野村という共同体もあります。だから、実は地域共同体は3つぐらいあるのです。だから、僕はその3つに属していると思ってもらえばいい。ただ、日常生活領域になると、圧倒的に力を持ってくるのは集落の共同体で、僕のところは特に山の中ですから、そうすると、そこの助け合いは極めて重要になってきます。だけど、決してその地域共同体がすべてではなくて、もう、さらに2つぐらい地域共同体があります。

僕は上野村には魚釣りに行つて住み着いたという人間ですから、村では趣味的な仕事はしますが収入源としての仕事はしていないので、そっちの方は関係ありません。でも村に住んでいる人たちには、仕事別の共同体があります。それは農業者の共同体もあるし、林業者の共同体もあるし、あるいはうちの村では木材加工系の仕事をやっている人たちが多いですから、そういうものもあるし、さまざまな仕事別の共同体があります。

さらには、お寺の檀家さんや神社の氏子さんたちの持っている共同体もあるし、それからまた、伝統芸能を守っていく共同体みたいなものもあり、実に多様な共同体が存在します。

助け合いがしやすい重層的な共同体

ひとりの人間がその中の幾つかに属しており、決し

て一つのものだけに属しているわけではない。だから、上野村という共同体社会の中には小さい共同体がいっぱい集積していて、その中の幾つかにすべての人が加わっていく、というかたちがあるので、実は助け合いはやりやすくなるのです。

例えば、私が上野村でもし木の上か何かから落っこちて、それで大ケガして家でしばらく寝ているとすると、たぶん近所の、集落の共同体から誰かが来て、ちょっとご飯ぐらいを持ってくる、といったことをやってくれるとは思いますが、しかし、あまり長期にわたってくると、近所の集落の共同体も高齢化していますので、だんだん負担が大きくなり周りも大変になってきます。

そうすると、僕もまた上野村の中でも幾つかの共同体に所属しているので、だんだん役割分担ができてきます。「じゃあ、こういうことはうちでやろう」とか「こういうことはこっちがやるから」といったかたちで非常に重層的な助け合いができる仕組みになっています。もちろん、そこで役場も出てきますから、お風呂に入るのは、じゃあデイサービスセンターに連れて行って入れようかということになるでしょうし、食事もうずっと近所が作っているのでは大変だということになると、じゃあ、晩ご飯はお弁当を届けようかとか、村の中に給食センターみたいなものがありますから、その弁当を届けようか、ということになります。

このように実は役場もまた丸ごと面倒を看なくて済むことになります。つまり、幾つかの共同体が分担して看ている部分と、そこだけではちょっと苦しくなっている部分を、機能的な仕組みを持っている役場が、じゃあ、ここは役場でやりましょうということで助け合いの仕組みができてきます。

だから、わりに長期にわたる助け合いが可能となり、それがいくら共同体は助け合うと言っても、2カ月も3カ月も小さい集落で助け合いだけで頑張りぬくという、周りも助けてもらいたい事態になってしまいます。その辺は、重層的な共同体があるからこそできることです。その重層的共同体の一つとして、こういうときには役場の機能も発揮されてくる。だから、ほかの点では役場というのはまったく違う機能を持ちますけれども、助け合いの中では役場も共同体機能の一つの部分を代行するということができるのです。

小さい共同体を積み上げていく

このような共同体のかたちを、私は「多層的共同体」

と呼んでおり、共同体は、実は小さい共同体が多層的に積み上がってこそ共同体の社会ができるのであり、決して地域社会の人が一つの組織に結合している状態ではありません。その小さい共同体の中には、非常に歴史を持っている強固なものもありますし、それから、ひょっとしたら数年後には消えてしまうようなものがあったとしてもよいでしょう。

実際、上野村でも同様です。最近、村でも新しい共同体的雰囲気を持っているものの一つに、例えば小さいお子さんがいるお母さんたちの子育て共同体のようなものがあり、本当にいろんなかたちで協力し合っています。ただ、これは数年後にはメンバーが全員、入れ替わるかたちで続いているかもしれませんが、もしかすると消えているかもしれない。そのときには、またそのところの子育てをするお母さんたちが新しいかたちのものをまたつくっているかもしれない。

だから一時、非常に重要な役割を果たすけれども、もしかすると持続性を持たないものもあってよい。だけど、その一方において、すでに1000年以上続いてきたような仕組みもあります。共同体という言葉を使いながら、その小さな共同体のありようを見ていくと、決して均一なものがあるわけではありません。本当にしっかりしたものから淡いものまで、さらにはかなり大きいものから小さいものまであり、そういったものが多層的に集積している。そこにこそ本当の共同体があるということです。

都市部についても同様でしょう。もし、私たちが都市部でもう一度、共同体をつくろうということで巨大な町内会みたいなものができあがり、それがそのメンバーを完全拘束しているということになったら、ある面ではそれもいいかもしれませんが、ある面では逆にうっとうしくなってしまう。こうした意味で、それが最終目標ではないだろうという気がします。

では、最終目標はどこにあるのかといった場合、やはり、小さい共同体をどのように積み上げていくか、という重層性や多層性について考えなければいけない。実際、例えば江戸のまちを見ていくと、そういう共同体社会だったという気がします。例えば、長屋の共同体があった。だけど、長屋の共同体だけがすべてということでもなく、それ以外に職業別共同体（職人たちの共同体）などをまた同時に持っている。それから、江戸のまちというのは地方から出てくる人たちによってつくられたまちですから、出身地別の共同体が非常に強固にありました。また他にも、檀家さんや氏子さんなどの共同体も非常に強いものとしてありまし

た。

さらに江戸のまちには講という、自然信仰を果たしていく組織がありました。一番多かった講は富士山信仰ですが、それ以外に丹沢の大山講や高尾山の講などさまざまなものがあり、そこもまた一つの助け合い組織でもありました。だから、自分たちの自発的な、いわば信仰集団のようなものですが、これもまた宗教というよりも生活の中に根を下ろした助け合い的生活を持っているようなものだったということです。

このように江戸でも、一人の人間が幾つかに属しているという構造があり、江戸の共同体社会が出来上がっていました。そして、これからの都市部の共同体を考えていく場合でも、いかにしてさまざまな小さい共同体をつくるかということが課題になり、そして、その場合、共同体の中にはさまざまなものがあってよい。だから、場合によっては今年できかかったのに、来年には早くもつぶれてしまうというようなものがあつたって構わないし、それから、この後、何百年も続くようなものがあつたってももちろんいいし、組織のありようとしても、非常にしっかりしたかたちを持っているようなものがあってもいいし、それから何となくもうちょっとふわふわしたような、ちょっとしっかりしていないようなものがあっても構わない。つまり、さまざまなものが積み上がっていることこそ重要であるということです。

労働力と生産物で助け合う農村社会

もう一つ言えることは、かつての共同体のあり方を見ていったときに、農村部の共同体と都市部の共同体の違いが一つあるような気がします。それは何かといえば、農村部の共同体では、助け合うときに自分の労働力と、それから、あと自分の生産物を使って助け合っていくというのが基本でした。というのは、農村の人たちは、基本的なことがみんな自分でできるわけです。だから、例えば田植えの季節にどこかの農家の人が参って倒れてしまったら、近所で田植えしてあげればいいわけで、そんなことは誰でもできるわけです。それから、また、金銭的に行き詰ってしまったようなときでも、例えばみんなで協力して、お米を一俵あげれば、それは食べてもいいし、それから昔はお米というのは換金作物でもありますから、それを売ってお金に換えてもよいのです。つまり、自分の生産物をあげることによって手助けができる。農村社会では労働力と生産物で助け合うことができたのです。

ところが、江戸の時代でも現代と同じように、都市部ではそうした助け合いができない。というのは、労働のあり方が多様になってしまっており、基本的な仕事での労働提供は大変難しい（もちろん夕ご飯を作ってあげるとか、掃除に行つてあげるという意味での労働提供はできますが）。だから、例えばかんざし職人さんが病に伏せているからといって、大工さんが行つて代わりにかんざし作ってあげるわけにもいかない。だから、そういう仕事そのものの労働提供ができないという性格が都市部は昔からありました。

それから、生産物の提供によって助け合うということも非常に難しく、例えば江戸のまちで一番強い共同体をつくっていたものの一つに「火消し」がありましたが、火消しは何か生産物を産み出すわけでもないの、生産物で助け合うことさえできない。

お金で助け合う都市部のコミュニティ

つまり、こうなってくると、農村型助け合いのあり方だけでは不十分になります。日常生活上で、ご飯を作つてあげたり、掃除してあげたりするような助け合いはできますが、もっと深く助け合おうとすると難しい、ということです。その場合に、都市部の助け合いはどのように行われたのかというと、実はお金を提供し合うというやり方を多く取りました。困っている人に仲間がお金をいわば融資するというかたちを取りました。だから、都市部の助け合いでは、お金という問題が欠かせない。

例えば今、僕は日本でもっとコミュニティをつくらうといったことをよく発言していますが、その割に、なぜあまり力強いコミュニティができないかといえ、簡単な理由だと思っています。それは他者のためにお金を提供できないから、これではコミュニティができませんということだと思っています。だから、みんなして知恵を使って助け合つてというところまでは言いますが、実はお金の提供はできない。つまりお金が完全に私有財産化しているのです。

昔は、お金は天下の回りものと言つたように、自分たちで回すものでした。ですから、都市部ではお金を使う助け合いが非常に重要だった。先ほど、小さい共同体にはしっかりしたものもあつていいけれど、できすぎ消えるようなものがあつたって構わない、というお話をしました。ただ、それでも単なるグループと共同体は違います。共同体というのは、メンバーの中に何らかの事情で困つた人——悪い人という意味では

なくて行き詰まった人という意味ですけど——が発生した場合には、無条件で助けるということを前提にした組織です。だから、人々が困ったときに助けてあげないというのは共同体ではないわけで、それは単なるグループです。

無条件で助け合うという精神を

だから場合によれば、子育てグループでもいいし、例えば逗子の自然を考える会だって構わない。つまり活動内容はさておき、ただ、それがメンバーの中で何らかのかたちで行き詰まるという人が出てきたときに、他のメンバーが無条件で支えていくという精神を持っているのが共同体です。例えば逗子の自然を考える会をつくったけれども、メンバーの中でいろんな理由で行き詰まった人が出たときに、あくまで自分たちの活動内容である、逗子の自然を考えることしかしないのであれば、これは共同体ではありません。もちろん別の意味では、その会は有効な役割を果たしますが、共同体的な考える会となるためには、そこで無条件で助け合うという精神が必要です。その無条件で助け合うときに、都市部の共同体では、お金という問題を切り捨てることができません。

僕も上野村でも多少みんなと一緒にさまざまな活動をしています、東京でもさまざまなグループに加わっています。都市部ではコミュニティがない、という言われ方がよくされますが、最近、コミュニティをつくり始めている人たちは、自分が加わっているコミュニティが多すぎて、すべてに顔を出すことができないということが現実になってきています。だから、あつちに行くけど、こつちは今回ちょっと失礼するか、そんな感じでやっている人たちと、コミュニティがまったくないと言っている人たちの二極に分解してきています。

出資金は返済せずに次の事業に

それで、私にもいい仲間がいっぱいいますので、いろんなコミュニティをやっています。昨日、1つのグループではワインの新酒のお祝いをやっていました。実は僕らでつくっているレストランが東京に2店舗あり、それは東京の日比谷にあり、僕らのたまり場でもあります、よかったら行ってみてください。国際ビルディングという帝国劇場が入っているビルの地下1階に、「につぼんの…」のという、ひらがなで「につぼ

んの」なんですけど、あと「とかちの…」という名前と、2店あります。両方とも僕らが出している共同レストランで、自分らのたまり場を兼ねているような感じです。普通のお店ですので、普通のお客さんもたくさん来ています。

例えば、「とかちの…」が先だったのですが、「とかちの…」は十勝の仲間たち、だから帯広地区の仲間たちが食材提供する形で始めたので「とかちの…」になったんですけど、もう一店舗つくったときに、全国の8カ所ぐらいの農民とか漁民とかが食材提供をしていて、その人たちもよく来ますけれども、そういう共同レストランと。

結局、東京って広すぎて、みんなが気軽に来られるところであり、それからまた地方の仲間たちが寄っていく場所でもあるので、都心のど真ん中にやるしかないということで、東京駅から歩いて10分かからない場所にせざるを得なかったということもあります。

開店資金として4,800万円掛かっていますので大変ではありますが、ただ、やはり今の時代だと思うのは、自分たちでそのお金を集められるということです。実は1,000万円は愛媛銀行さんの出資です。融資ではなくて出資です。融資は借金になりますけど、出資は倒産すれば終わりますから。愛媛銀行は地方銀行のあり方をずいぶん検討してきて、こうした動きに協力してくれており1,000万円出資しています。ほかの大半のお金はみんなの拠出です。僕も若干だけ出資していますが、いかなる理由があっても出資金は返済しないという出資です。儲かったら、そのお金は次の事業に使うということになっています。そうしたかたちで屋台村を、実は帯広と高崎でもやっているの、僕らは4店舗持っていることになってますが、全部それぞれの地域の人たちの出資で動いています。

出資で自分たちの生きる世界をつくる

そういうことの中でも、今ようやく（自分のためでもあるのだけど）取りあえず良さそうな仕組みをつくるための、みんなのためにお金を使っていくことができるようになってきました。実際、東京の店舗では4,800万円掛かっていますから、おそらく数百万出資している人もいれば、10万円ぐらいの人など、さまざまだと思いますが、そのことによって自分たちの生きる世界をつくっていくと。

昨日はそこで、ワイナリーの人たちが多い山梨の仲間たちが新酒を持ってきて、それをみんなで飲みなが

らお祝いするという集まりをやっていました。みんなで酒を飲んで喜んでいるのですから、これも一面では非常に緩やか共同体です。だけど、そこでお金の出し合いもできるし、また何かあればいくらかでも検討できる、一つの共同体的な集まりです。こうしたものが、おそらく都市部の共同体を考えていくときの一つのあたりであろうという気がします。

生きている世界を基盤に社会をつくり直す

結局、現代社会は非常に大きなシステムに振り回されてしまいます。福島原発事故についても、いったん事故が起きてしまうと、神奈川県でいえば足柄茶まで影響を受けてくる。それに対して、足柄の農民には本当に何の責任もないのに、事故が発生した年には、手の打ちようがないという事態に追い込まれていきました。

それはこの後、予想される日本の国際問題も含めてです。例えば金融がちょっと世界的に怪しくなると多くの人たちが巻き込まれざるを得ません。本当にリーマンショックのときなどは、アメリカの金融機関がいわば無謀な融資の仕組みをつくって勝手にコケただけですが、その結果として、株も1株も持っておらず、貯金もほとんど持っていないような日本の非正規雇用の人たちが切られていくという、まったく腹立たしい事態になってしまいます。株の投資をやっている人があおりを食らって損をしたというのであれば、そのリスクは当然あるので、自分の責任でしようとも言えますが、何の責任もない人たちが、つまり一番弱いところから影響を受けます。

こういう世界のありようは、もう根本的に間違っていると看做ざるを得ない。そういったことも念頭に置きながら、僕は今コミュニティの時代、共同体の時代をつくろうとしている。最終的に着地していくのは、僕はこの社会のつくり直しだし、大きなものに振り回されて生きていくのではなく、私たちの生きている世界そのものが基盤になっていけるような社会です。それをつくり直さなければいけないし、そのためには絶えず伝統社会のあり方から学びながら未来を考えると、この思考が要るのだらうという感じがしています。

基調講演／討議 〈冒頭発言〉

山梨崇仁（葉山町長）

山と海が共存したまち
さまざまな地域性とそのあいだの温度差
地域の方々と町の信頼感を

プロフィール：山梨 崇仁（やまなし・たかひと）

葉山町長

1977年東京都渋谷区生まれ。関東学院大卒、法政大学大学院政治学研究科修了。在学中から2003年まで、ウィンドサーフィン・ミストラル級にてシドニー、アテネ五輪を目指し選手活動を行う。引退後は民間企業にて人事コンサルタント。葉山町の空間を愛して移住し、政治の世界へ。葉山町議会議員を経て、2012年より現職。まちづくりの基本理念は「町民が休日を楽しく過ごせる町へ」。本年度は行政テーマを「子育て」に位置づけ、待機児童解消の他、地域の子育てを考える虐待防止の啓発や自然体験プログラムの設置など、行政の仕事と町民の思いがテーマを通じてひとつになるまちづくりを目指す。



基調講演／討議 〈冒頭発言〉

山梨崇仁（葉山町長）

山と海が共存したまち

内山さんの哲学的な講演をお聞きしましたので、制度的な観点からでなく、若干、主観的な視点からお話をさせていただきます。葉山町は、今日ここにいらっしゃる際にみなさんもお感じになったと思いますが、非常に緑豊かであり、一方では御用邸を抱える海岸線もありますので、山と海が共存した自然豊かなまちであります。

そしてまた、最近は移住されてくる若い方々が増えていますので、もともとの人口減を移住者が補って来て、人口としては横ばいになっている状況です。それによって、先ほどもお話がありましたが、お祭りについても氏子会を中心に、と言うよりは、みんなが祭りに集まって地域が盛り上がるんだ、といった気持ちの方々が多く集まることで、お神輿が各地域で立ち上がっています。また、こういった海や自然の環境を保全していきたい、このまちの歴史的な風土を皆さんにご案内していきたいといった、まちづくりのボランティアの方々も多数いらっしゃいますので、コミュニティを担う主体的な動きが非常に数多くあります。

また町内会についても、昨日、平井市長からも当然のように、地域の主体として期待する声があったかと思いますが、葉山町の町内会でも非常に熱いみなさんが集まっていらっしゃいます。実は昨日、私がこの円卓会議に参加できなかったのは、町の総合防災訓練を実施していたからですが、多くの町内会の防災担当の方々が主体となり総合防災訓練を行うことができました。

さまざまな地域性とそのあいだの温度差

ただ課題として申し上げれば、そういった防災訓練にもあてはまりますが、いかに維持継続していくかということが非常に難しい状況にあります。3.11を経て防災に非常に関心が集まる中ではありますが、昨日の

防災訓練では参加者数が2割、3割と減っている。それは地域での防災訓練も同じだという声も頂きました。そうした意味で、思いをつなげていき維持継続させていくことが大きな課題なのかなと思っております。

それから、もう一点、申し上げると、先ほど触れましたように町は農村部と、海側の宅地部がありますが、そこにはそれぞれの地域性のあいだに非常に大きな温度差があります。例えば、ウーッと鳴る消防団の招集のサイレンを皆さんもお聞きになったことがあるかもしれませんが、町では今、そのサイレンをやめて、携帯電話で消防団の呼び出しをしています。農村部の方々からはなぜサイレンをなくしたんだ、あの音がないと、どこで火事があったかわからないじゃないかという声があがる一方で、堀内や逗子寄りの宅地部の方々からは、「あのウーッという音は何なんだ。夜中に起こすんじゃない。あんな音は早く廃止しろ」といった声があり、真っ向からぶつかる状況があります。

地域の方々と町の信頼感を

これは、人口3万3,000人という小さな町が抱えている象徴的な課題として今、お話ししましたが、地域にはそれぞれの地域性が非常に色濃くあり、小さな町でありながらも、その地域の中でそれぞれに合わせたかたちで力を入れていかないと、今後の維持継続は非常に難しいなと感じている次第です。町として、私が今考えていることは、そういった課題に対し、従来、行政はどうしても画一化、公平性、継続性による線引きをしなければならないのが仕事だと考えられていました。

しかし、私が今思うことはまったく逆であり、そういった地域に対する不平等感、不公平感によって地域の方々と町との信頼感が結び合っていくことで、葉山町全体としての行政と地域のつながり、そして、その地域を支えていくことができる行政のあり方があるのではないかと考えているところです。この背後には、

地域の味方になり、一方では時として国や県と対峙する、そんな市町村が必要とされているのではないかと
思っていることをお伝えして、私からの冒頭発言は終わりたいと思います。

地域力をいかに育てるか

～ “分かち合い” で築くかながわの未来Ⅱ～

事例報告 1

多様なかかわりによる子どもの育ち

奥山千鶴子（特定非営利活動法人びーのびーの理事長）

子どもも親ものびのびと
お金より居場所が欲しい
今ここにいるお母さんたちから学ぶ
子どもを産み育てるのが当たり前ではない社会
地域の中で関係性を築いていく
先回り育児にならざるをえない環境
地域と家庭を結ぶ縁側のように
子育て支援から家庭全体の支援へ
市民感覚、肌感覚をどれだけ打ち出せるか
子どもの存在で親や社会がつながる

プロフィール：奥山 千鶴子（おくやま・ちづこ） 特定非営利活動法人びーのびーの理事長

青森県出身。2男1女の母。大学卒業後、大手旅行代理店の子会社に就職。1994年に長男を出産、会社の育児休業取得第一号となる。96年に退職。地元横浜市港北区の保健所が発行する「子育て通信」の編集ボランティアを経て、2000年、NPO法人「びーのびーの」を設立し、同区内に「おやこの広場びーのびーの」をオープン。05年には港北区の委託を受け、区内2カ所目となる子育て支援拠点「どろっぴ」も開設した。現在、「子育てひろば全国連絡協議会」理事長、横浜市教育委員も務める。



事例報告 1

多様なかかわりによる子どもの育ち

奥山千鶴子（特定非営利活動法人びーのびーの理事長）

子どもも親ものびのびと

最初に「びーのびーの」という名前ですが、これは単純に子どもも親ものびのび育っていききたい、子育てをしていきたいということでつけた名前です。まず法人の概要を説明させていただきますと、最初、私たちが立ち上げたのは20坪の小さな商店街の空き店舗での親子の交流の場でした。それを「おやこの広場びーのびーの」と呼んでいます。2000年4月に開設です。私自身は、この前に6年間ほど、子どもを育てながらボランティア活動をしていました。横浜には児童館がなかったので、公園が根城でした。お弁当と水筒を持って一日、公園にいるような感じでした。

行政と共にボランティア活動をする中で、行政は子育て支援をやっていると言うけれど、まったく市民に伝わっていないぞという思いがありました。私たちが欲しいのは交流の場でしたが、幼稚園に入るまでのそれまでの期間、行政からも町内会からも何も支援をいただいてないという感覚がありました。要するに、幼稚園に入るまで新参者に対して、地域が受け入れる場がない。だから、自分たちの方からアプローチしない限りはサービスも受け取れないし、誰も助けてくれないんだという思いの中で、それであれば、自分たちで何とかするしかないかなということで、その公園仲間だったお母さんたちとともに、行政の中では居場所が足りないなと感じたようなことを考えて、2000年に親たちが勝手な事業として立ち上げました。

お金より居場所が欲しい

2002年からは行政の補助が入り始めます。その間の2年間はすべて自分たちで場所も借りて、月20万円の家賃も払っていました。主婦の手に負えないよねという思いも何かありながら、でもお金より、むしろ場所が欲しいという思いで、お金は後から付いてくるんじゃないかという無謀な事業計画で始まりました。でも、そ

んな無謀なお母さんたちを何とか支えてあげたい、という多くの人たちの思いもあって継続できています。そうした活動なら応援してあげようということで公的な支援も後から付いてきたかと思っています。

その後、介護保険ができて、介護の世界がすごく盛り上がり介護は社会が応援するという機運ができていく中で、「ああ、子育てはまだまだだな」「やっぱりお母さん、子育て頑張りなさい」と言われているような気がしました。でも、仲間と一緒にやれば少しは支え合いながらやれるかな、という思いでやってきました。

でも、そういった活動が少しずつ認められてきて、2006年には横浜市港北区の委託事業として地域子育て支援拠点「どろっぷ」を受託することができました。横浜市は、お金も掛かるので、建物をすべて自分で造ろうという気がなく、最初は「賃貸物件で、どこかいところを探して、やってください」と言われました。ただ、子どもが育つ場所は土が触れられるところで、という思いがありましたので、ビルの2階や3階ではやろうと思いませんでした。

そこで、「もし、いい物件が見つからなかったら、家賃と同じ分で地域の人に建ててもらってもいいですか」とお聞きしたところ「いいですけど、そんな土地を提供してくれる人がいますか」と言われ、いろいろと探しました。それまでに町内会の方々ともいろいろ連携もできてきている中で、一緒に探して「いいよ」と言ってくださる方がいました。江戸時代から続く農家の方で、土地をたくさんお持ちで、そこも農地でした。それまで、おそらく私たちのようなNPOとは接点がなかったと思うのですが、経緯を説明して「そういうことなら」ということで、建物も建ててください、そして貸していただくことができました。

今ここにいるお母さんたちから学ぶ

後でも少し話をしますが、行政との委託の中で、市民の主体的な活動を事業化していくということで、

「私たちの思いを100%かなえてほしい」という思いがある一方で、行政側には、公平性、平等性という枠のなかで、受託者に対しては「こうしてほしい、ああしてほしい」という思いがあります。

また当初、どろっぷをつくったときに行政の職員の方ととても意気投合して、一緒に協働事業として始まったものが、やはり職員が入れ替わっていく中で、どんどん厳しくなり、最初の趣旨とだいぶ違うぞという思いが出てきたりしました。そうしたときに、自分たちの思いをどのように、ここを利用されているお母さんたちにも伝え、それから社会にも伝えていくのかということの難しさも感じてきた、この8年間のどろっぷの運営でもありました。そんなこんなで、いろいろなことと対峙しながら、やりながら、考えながら、13年間子育て支援をやってまいりました。

私自身もどんどん子育て当事者の感覚から離れていってしまっているので、私たちは、行政からの委託事業だけではなく、その時その場に来ている親子から学び、今ここにいるお母さんたちが感じていること、課題として思っていることを拾い上げながら事業を展開していかなくてはいけないという思いでした。そんな中で、行政からお金がもらえない事業もたくさんあります。

例えば、今は就労していなければ子どもを預かってもらうことはできません。でも、来ている親子さんを見ていたら、親のメンタルな部分が懸念されたり、一人親家庭、そして、お子さんの発達が心配なお母さんなど、さまざまな方がいらっしゃいます。そういう人たちには就労していなくてもお子さんを預かってあげることが家庭にとっても子どもにとってもプラスになるということで預かり保育をやっています。これは行政の補助が入らないので高いんですね。でも、高いけれど、何とかこれは次のステップとして行政から補助をいただくか、何か安くする手段を考えなくてはならない状態です。

それから出版事業もしています。もともと住んでいるところであれば、どんな幼稚園なり保育園か、わかりますが、横浜は非常に新参者、ニューカマーが多いところなので、幼稚園や保育園についてきちんと園の方針やお金のことも含めて情報提供が必要だということで、冊子を作って販売しています。また今の若い人たちは、まずはインターネットからアクセスしてくるので、そういった情報提供も必要だということでSNSの活用などもしているところです。もちろん、フェース・トゥー・フェースの顔の見える関係が大事

ですが、そのためのつなぎという意味での情報提供をしています。

子どもを産み育てるのが当たり前ではない社会

さて、今の日本の状況についてお話ししますと、男性も女性も結婚年齢が上がっており、第一子の出産時の母の年齢も30歳を越えています。それから結婚しない理由については、男性は「結婚後の生活資金が足りない」「結婚資金が足りない」ということが上位に挙げられ、いまだにお金に縛られて、ある程度の稼ぎがなければ結婚できないという考え方が強いです。一方、女性では、「自由や気楽さを失いたくない」「必要性を感じない」ということが理由として挙げられています。

こうした結婚しない理由も併せて、子どもを産み育てるということですら当たり前ではない社会の状況を共有し、そして、なぜそういう社会になってしまったのかということを考えていく必要があるかと思えます。家族を持つとはどういうことなのか。そして、子どもを産み、育てるということはどういうことなのか。本日、内山節さんが過去、現在、未来という話をしました。サステイナブルな社会を考える際には、自然環境への配慮とともに、子どもを産む、あるいは家族をつくるということすら実はままならない、この日本の社会そのものについて考えてなくてはならないと切に思っています。

地域の中で関係性を築いていく

2009年の横浜市の次世代育成支援に関する市民意識調査でも、18歳以上49歳以下を対象とした「お子さんがいる方は、お子さんが生まれる前に、お子さんがいらっしゃらない方は今までに、赤ちゃんのおむつを替えたり食事をさせたことがありますか」という問いに、50.3%が「ない」と答えています。昔は、親戚が集まれば、いそこがいっぱいいました。うちの場合も、両親は兄弟が多かったので同様です。でも、私自身はひとりっ子で、夫はふたり兄弟ですね。うちの子どもは3人いますが、夫の弟のところは子どもがひとりなので、いそこがひとりという状況です。

一般的な傾向としても、親戚が集まって身の回りに赤ちゃんがいるという環境が、少なくなっているのだと思います。マンション、アパートで子育てをしていて、トントントンと隣の人のドアを叩いて「手伝ってくれませんか」というのは、よほどの関係性が

ない中ではできません。そういう意味では、地域の中で関係性をどのように築いていくかというところが大事ですが、若い世代が関係性をつくるのには時間がかかり、赤ちゃんが生まれてから関係性がまったくゼロのところから始めなくてはいけない苦しさは地域にはあると思います。

先回り育児にならざるをえない環境

幼稚園や保育園に入る前は、母子関係の中で育っていますから、親がどうしたらいいかわからないという状況の中で、とにかく何でもやってあげる先回り育児にならざるを得ません。これはお母さんが悪い、とは言えず、そうした環境になってしまっている、ということです。そして、親自身が子どもと関わる経験が少ない。子どもは親以外の大人との出会いが少ない。夫は働くことばかりに時間を削られ、子どもと関わる時間が短い。そして外遊びで、子ども同士の群れ遊びが少ない。今、小学校に入るまでの子どもが、公園で子どもだけで遊んでいたら「親はどうしたんだ」と言われます。子どもだけで遊ばせられないコミュニティになっています。

12歳以下のお子さんがある家庭を対象に「友人や近所の人、子育て仲間から子どもを預かることがあるか」と尋ねたら、個人主義の国だろうといわれているフランスやアメリカよりも、日本は預かる率が少ない状況です。私は、自分の子どもが小学生の時、夏休みなどに田舎に連れていき、一ヶ月ぐらい、おじいちゃん、おばあちゃんのところで過ごすということがよくありました。そして、そのときに自分の子どもの友達まで連れて行きました。そこは関係性の中で、たぶん委ねていただいていたのだと思いますが、そういうことがどんどんしにくい日本の社会になってきているのだろうということを感じています。

地域と家庭を結ぶ縁側のように

「子育てが辛いのではない。子どもたちはかわいい。でも不安や孤独で押しつぶされそうでどうしようもない時がある」という感覚は、子どもが生まれるまで気がつかない感覚ですね。子どもがいなければ、社会の中でひとりだけならやっていけるのですが、子どもが生まれて地域との関係をつくらざるを得なくなると、自分が、身動きがとれなくなって初めて感じる感覚です。すごくいいきっかけだと私は思っています。

というのは、自分自身もそうだったからです。私はバブル期に仕事をしていて、自分ひとりで何とかなると思い上がっていましたが、子どもが生まれて、地域の大切さや、この子の未来を感じるようになり、過去、現在、未来という時間軸を考えるようになりました。だから、子どもが生まれるってすごいことだと思えます。

そこで、お母さんやお父さんのこうした気づきを、地域や社会がどのように応援するか。そこが今非常に問われているなかで、子育て支援をしていきたいと考えています。子育て広場は、地域と家庭の縁側のような存在だと思います。家族と地域の溝が深いので、子育て広場はそこに風穴を開けて、その間を取り持てるというなという思いでいます。

子育て支援から家庭全体の支援へ

子育て支援を始めるにあたって、いろんな言葉を参考にさせていただきました。「完璧な人はいない」というカナダの考え方。親もそう言うてもらおうと、ちょっと肩の力が抜けて、ああ、学ばなきゃと思います。そして、「子ども一人を育てるには村中の人が必要」というアフリカのことわざ。たぶん日本でもそうだったのだと思います。子育てで親がすごく批判されることがありますが、そのように周りから「受容されたことのない親が、子どもを受容できるわけがない」ということも大切です。子育て支援、子育て支援という前に、家庭全体として受容し、応援していくという眼差しが必要ではないかと思います。主役は親ですよ。子育て支援は親を甘やかすことになるのではないと言われることがありますが、そうではなく、やはり主体は親だという考え方です。

「子どもは放牧して育てよ!」というのは私が、とても大好きな言葉です。でも実際には、さきほど話したように、公園で放牧して育てるのが難しい状況があります。であれば、どこで放牧して育てられるのだろうかということで、今は幼稚園や保育園で、ということになります。放牧することで、子どもたちはいろんなチャレンジをして大きくなるのだとしたら、その自分の限界ということを自然の中で学ばせていくことが一番だと思います。アクセルとブレーキですね。子どもを放牧して育てる環境は、親のまなざしの中だけではできないでしょうから、第三者が関わって、それを地域の中にどうつくるかがとても大事だと思っています。

市民感覚、肌感覚をどれだけ打ち出せるか

現在、横浜市港北区内で2カ所の拠点を運営しています。ひとつは、商店街の空き店舗を借り上げて、子育て当事者で立ち上げた子育て広場です。商店街は、コミュニティがまだ残っている感じでとてもいいですね。子どもが迷惑と思われない、そういう貴重な場所だと思っており、商店街で三輪車を乗り回して、子どもたちは大きくなっていきます。

もう一つは、行政からの委託で運営している「どろっぷ」という拠点です。委託事業なので行政とのすりあわせが必要などころもある中で運営していますが、土曜日にも開いているので、お父さんたちも来やすい。また園庭を何とか確保しましたので、どろんこ遊びをガンガンやっていて、高校生やシニアの方たちも活躍してくれています。

ちなみに、協働の話をすると時間がなくなってしまうので簡単にお話しますが、この施設の運営にあたっては行政と対立する部分もかなり多かったです。なので、同じ受託団体のネットワークで、協働協定書、役割分担表を作成し、行政側と私たち運営側の役割分担をきっちり確認し、成果目標を共有しながら取り組んでいます。受益者は施設の利用者なので、利用者からの評価もきっちりもらいながら取り組んでいく。事業者の運営側は、もう言われたことだけやっていればいいじゃないという感じにもなってくる時がありますが、それではいけないというところを確認しながら取り組むことがとても大事だと思っています。

なかなか日本では、契約書を細かく読み込む習慣がありませんが、契約書を見直したら、「えっ！」と思うようなことが多々ある場合もあるので、最終的にはそこに立ち返るということをきっちりと押さえて契約書を見ていくことはすごく大事です。そして、この契約書に自分たちのやりたいことを埋め込んでいくという作業も大事だと、この2、3年感じているところです。

行政とNPOが協働で行う価値というのは、私たちのもつ市民感覚、肌感覚をどれだけ打ち出せるのかというところにかかっていますし、そうした感覚を持っていること自体がNPOとしての価値だと思います。そして、情報や人が集積して、そこから発信していくことが大切だと思っており、目の前にいる親子、言葉にできないニーズ、課題といったものを可視化、言語化して、それを行政に伝えていく役割もあるだろうと思っています。

子どもの存在で親や社会がつながる

また行政との連携だけではなく、企業との連携や地域での活動も大切です。子どもの時に、周りから応援された人は、自分が大人になっても、きちんと周りの人に助けてと言える人になります。そして、中高生も近所の大人との関わり合いが多ければ、子育てに対するイメージもよいものになるので、ぜひシニアの方には子育てに関わってください。そして実際に、私たちはシニアの方たちに「その子たちが親になるときに必要なことです」とお伝えして、関わってもらっています。子どもは真剣に関わってくれた大人を一生忘れません。それは保育園や幼稚園の先生かもしれないし、学校の先生かもしれない。

社会にとって、子どもがいるということはすごく大切だと思います。そのことで、親や社会がつながっていただけるのです。私たちは、少子化社会にもっと敏感でなくてはいけないと思いますし、子どもが大切にされない社会に未来は来ないのではないかと考えています。子どもにとってのふるさと（人生の根っこ）づくりは大人の責任であり、これはどこに住んでいてもやらなくてはいけないことです。本日、内山さんがお話しされていた、過去、現在、未来の時間軸が、子育てには本当に重要なことだと改めて感じることができました。そして、その子どもたちが未来であるということを感じています。

今、子育ての制度もいろいろと動いている中で、フォーマルな部分の制度のよりよい改定とともに、地域の中でのインフォーマルな支え合いの社会をつくっていくことの両面で、進めていかなければいけないということを感じています。これからもNPOとして両方に目配せをしながら活動を続けていきたいと思っています。

地域力をいかに育てるか

～ “分かち合い” で築くかながわの未来Ⅱ～

事例報告 2

地域全体を見据えた高齢者ケア

加藤忠相（小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん代表者）

その人に合わせたサービスを
管理する介護から元気になる支援へ
料理をして片づけもしてくれるばあちゃんたち
タイヤ交換や畑の指導をするじいちゃんたち
小唄を歌い大騒ぎ
子どもたちとギャングごっこ
日常の中の当たり前の交流を
子どもたちが被災地に寄付を
駄菓子屋さんという楽しみ
お年寄りには豊かな社会資源
お餅つきで地域の人たちをもてなす
自立の支援こそが介護の仕事
地域への社会参加で幸を広げる
心根の優しい介護職が働ける場を

プロフィール：加藤 忠相（かとう・ただすけ）

小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん代表者

株式会社あおいけあ代表取締役社長。神奈川県藤沢市で高齢者福祉サービスを実施している。お年寄りの管理・支配をする介護の現状に愕然とし、現在の会社を開始する。お年寄りの力を使って地域へ拡げていくことをモットーに、小規模多機能型居宅介護「おたがいさん」を展開。その取り組みは、「第1回かながわ福祉サービス大賞」として認められ、地元を中心に同じ思想を持った仲間とともに取り組みが広がりにある。



事例報告 2

地域全体を見据えた高齢者ケア

加藤忠相（小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん代表者）

その人に合わせたサービスを

私は大学のときは教員課程にいたので、全然お年寄りの仕事は関係なかったのですが、ひょんなことから家の事情の関係で、特別養護老人ホームで働くことになり3年間働きましたが、どうにもこうにも肌が合いませんでした。働く前はじいちゃん、ばあちゃんとお茶を飲んでほのぼのというイメージでしたが、実際には5分ごとにマニュアルが決まっており、それ以外のことはできないという状況にすごく不満を覚え、3年でこらえ性がなく辞めてしまい、25歳のときに自分で会社をつくって、グループホームとデイサービスから始めました。

デイサービスをやっていると、それは在宅を支えるサービスではあるけれど、例えば1週間に1回来ているお年寄りには、6時間しかばあちゃんのことを知らないという状況ですので、全然在宅を支える実感がありませんでした。そうした中で、全国にある宅老所をモデルにして、平成19年から制度化されたのが小規模多機能です。介護保険のサービスとして位置づけられています。

詳しい説明は、今日は時間がないので避けますが、通所介護だと、通う時間が例えば7時間というように決まっていますが、小規模多機能の通い時間は決まっていません。なので、朝7時にはばあちゃんを奥さんが連れて来てばあちゃんを置いて仕事に行ったり、あるいは「今日は会議があるから、夕飯を食べてから送ってもらえますか」「今日は会議でちょっと延びちゃうので、9時ごろお迎えに行ってもいいですか」といったかたちで、例えば通いの部分もその方に合わせてできます。お泊まりもその日の夕方に「今日泊めて」と言われても、泊めることができるし、夜中に呼ばれても駆け付けることができるということで、非常にその人その人に合わせたオーダーメイドのサービスが可能となります。

管理する介護から元気になる支援へ

今日は地域がテーマですので、地域についてのお話を中心に話をさせていただきます。

平成19年に小規模多機能を始める段階で、地域に開くことを意識して建物も造りました。パタ臭い建物ですけど、面白いのは、2階から屋根にぐると登れて遊べるようになったりとか、2階の研修室となっている部分に関しては習字教室になっており、週4回、地域のお母さんや子どもたちが習字を習いに来る場所になっています。

建物の配置としては、グループホームとデイサービスと今回紹介する小規模多機能「おたがいさん」が1か所にあり、塀や柵など一切造っていません。全部壊して真ん中の通路のところを小学生たちが皆この中を通って学校に行ったりとか、サラリーマンもここを通って駅に行ったりですとか、さらには高校生カップルが帰りは手をつないで歩いているとか、ちょっと甘酸っぱい光景もこの場所で見かけます。

自分が東京で働いていたときは、「その施設は誰のための場所？」といえ、だいたい高齢者のためと答えるのですが、多くのところが職員の職場になってしまっており、職員の都合にすべて合わせて動いているというのがすごく不満でした。例えばどこかのデイサービスの施設では、天井はすごく高く明るく、テーブルもきれいなのですが、皆さんにお聞きしたいのは「ここに座って6時間いられますか？」ということ。たぶん多くの方は難しいと思います。スターバックスで6時間いるのも難しいと思いますからね。そして歩こうとすれば「〇〇さん、座っていて」と言われてしまうし、立ち歩くと、「はい、〇〇さん、徘徊」となってしまいます。

今の介護現場では、基本的に縛られて、支配管理されているというのが多くの現状です。なので、僕らの仕事は、本来、支援しなくてはならないのです。介護保険というのは健康になる義務がある制度

ですので、自分の箱に閉じ込めて、世話になるお年寄りをつくっていたら、それは介護ではない、と考えています。とにかくお年寄りが元気になる支援をするということを意識しています。

料理をして片づけもしてくれるばあちゃんたち

すぐ近くの公民館での子育て教室の集まりの時にうちに来てもらおうと、ばあちゃんたちが面倒を看てくれたりすれば、ばあちゃんに子どもを預けてお母さんたちは、髪の毛を切りに行くとか、買い物に行くとか、そういうこともできて相互に支え合う関係ができます。また、何か特別な行事のときではなく日常的に光景として、ばあちゃんが割烹を着て野菜を切ったり、包丁とかも当たり前に使っています。じいちゃんなんかゴマすりなんかしてくれると、職員は、あとは味見するだけになってしまいます。梅干しの梅を近所に買いに行って、ばあちゃんたちと作ったり、今年はシソの種植えから始め、大量に作って、余ったものはジュースにして、公園体操で集まる地域の方に熱中症予防だと言って飲ませるばあちゃんたちです。

僕が夜勤で台所に立っていると、ばあちゃんが、そこは男が立つところじゃねえと言って、どこかされて全部皿洗いをしてくれます。ご飯の準備もそうですし、片付けるのも全部じいちゃん、ばあちゃんがやってくれる。よく「お宅では（介護度の低い）楽な方ばかり取らんですね」と言われますが、基本的にはケアマネさんの事業所からすべてご紹介いただいています。ですので、包括や他の事業所には行けず、もしくは取ってくれないような丸投げされるケースの方が多いです。誰も世話になっているような顔をしていませんし、認知症などみじんも感じさせない顔をしています。が、実は結構大変な方が多いです。

タイヤ交換や畑の指導をするじいちゃんたち

昔、車の関係の仕事をしていたじいちゃんは、タイヤの交換をしてくれたりします。こういうことをするのはわかっている、うちに来る前までは、家のあちこちでおしっこをしてしまい、ご家族はノイローゼ状態でした。また芋煮会の準備などでも、じいちゃんが鉈で薪を作ってくれます。NHKの「おはよう日本」でうちが紹介されたときに、もともと農家のじいちゃんが畑の指導をしている様子も放映されました。「俺もこれは60年やっているからよ」と格好いいセリ

フを吐いていましたが、うちに来る前までは、病院から退院したときにおうちでも寝たきり状態でした。

最初は訪問に行き行って起きてもらうところから始まり、庭の散歩、そして地域に出るの散歩と、だんだん「おたがいさん」のそばまで寄ってきて、お茶を飲んで帰るということをするようになりました。そして、このお年寄りが来るから畑を作ろうということで畑を作りました。もともと畑があるからやってくださいね、ではなく、農家の方がいたので、畑を作ったという次第です。うちに来る方々に合わせるかたちです。

小唄を歌い大騒ぎ

コメ作りなどもしているのですが、じいちゃん、ばあちゃんが植えているのを見て、ふだん遊びに来ている地域の子どもたちも苗を植えたくなるんですね。そこで、これも何かの企画ということではなくて、勝手に子どもたちがすぐ近くのヨークマートに行き行ってトロボ箱、白い箱をもらって来て、放課後に勝手に田植えをして遊んでいます。ただ苗が育ってくると、じいちゃん、ばあちゃんたちはちゃんと土から作っていますけれども、子どもたちは普通にただその辺の土を放り込んで作っているだけなので、成長が全然違ってきます。それを見て、やっぱりじいちゃん、ばあちゃんはすげえなと驚いています。

実際、私の長女が去年、小学校5年生のときにNHKの番組で認知症の問題行動の様子などを見て、「パパ、うちのお年寄りは認知症じゃないよね。みんな普通だもんね」と言うほど普通にじいちゃん、ばあちゃんが元気に見えています。これもつい最近のことですが、稲わらを使って、じいちゃん、ばあちゃんが縄を結ってくれて、大根を干したりするときに使っています。

夜はお泊まりがありますが、もともと芸者さんだったばあちゃんが泊まりに来るときには、人に飲ますのが好きなので、白鶴2パックか、一升瓶を持ってきます。そして小唄を歌いながら大騒ぎをします。泊まりのときはたいいちょとした宴会のようになり、仕事が終わったスタッフが相手をしています。たばこかも当たり前吸っていただきます。それまでの生活を、別に僕らが止めるものではないと思っていますので。

子どもたちとギャングごっこ

放課後には、すぐ近くの公園ではなく、ここに遊びに来ている子どもたちのたまり場になります。パンパン鳴る火薬の鉄砲で外で子どもたちが遊んでいるのを、じいちゃんが見て（もともとDVがあつて、どこの利用にもつながらなかったじいちゃんです）外に出ていき、子どもたちに200円渡して、「俺の分も買ってきてくれ」と頼んだら、子どもたちも律儀にかなり遠くの駄菓子屋までこれを買に行ってくれて、帰ってきてからギャングごっこが始まります。こっちが見てはらはらするぐらい走り回りますが、しばらく走り終わって、お茶飲みながら難しい顔をしているので「どうしたの？」と聞いたら、「子どもたちが200円持ったまま帰ってこないんだ」と。しっかり認知症ではあるのですが、それ以降も、子どもたちは「Sさんいますか」と遊びに来てくれるので、キャッチボールなど楽しんでいます。

日常の中の当たり前の交流を

なので、外から見てオープンの施設でなければ、「中に入っちゃいけないよ」という感じになるので、僕も例えば自分の子どもが入ろうとしたら「いや、そこはじいちゃん、ばあちゃんの施設だからダメだよ」と言ってしまうのですが、うちの施設ではそうではなく、外から見て「ここは遊んでいいんだな」という雰囲気を出せることを目標にしています。

夏には、かき氷なんかを作っていると、普通に子どもたちが入ってきますし、ばあちゃんたちは庭の柿の木の葉っぱを使って柿の葉茶を作りながら、レモンの何倍のビタミンCなんだとか言って、それを子どもたちは教わりながら、一緒に作っています。後ろでスタッフが立っていますけれども、もう、ほとんど遊んでいるような感覚ですね。うちのスタッフはほとんどバタバタしていないというか、業務というものは一切ありません。記録以外の業務は、掃除から何から全部お年寄りでやろうというかたちでやっていますので、スタッフはバタバタしていない。また草団子の会のときには、作った柿の葉茶をこのようにばあちゃんが後ろで淹れながら、地域の子も子どもたちも地域の方も、みんな一緒になって、その行事に参加しています。

よく高齢者施設での世代間交流として、「何年何組の皆さんいらっしゃい」という企画をやりますが、僕

の経験上、その後に子どもたちが一度でも来てくれた試しがありません。普段から当たり前に、何かしなさいではなくて、お互いのやっていることを見ていたりとか、時々絡んでいたりと一緒に作業をするような関係の方が当たり前の交流ができると思います。

子どもたちが被災地に寄付を

ばあちゃんたちが、最初ライトにしようと思って、いただいたヒョウタンに穴を開けて、顔を彫ったらかわいかったので、これも商品化しようという話になりました。最近スタッフはすぐ自立支援イコールお金儲け、のような発想が出てきて、ばあちゃんたちも作りながら売り上げで「今年はウナギ食べに行きてえ」とか「日帰りでいいから温泉にみんなで行こう」などと言いながら商品を作っています。そして、うちで行事をやるときに、ばあちゃんたちが作った商品を、子どもたちがよくわからない名前を付けて、貯金箱とかも800円とか強気の値段で売ります。じいちゃんが畑で作ったジャガイモやゴボウ茶、柿の葉茶も売っています。子どもたちは試飲をしたらもっと売れるんじゃないとか、いろいろ考えながら売っています。

今年になって、5月のことですが、地域の子も子どもたちが「今年は僕はじいちゃん、ばあちゃんが作ったのは売らない」と言い出して、ちょっと何かあったのかなと思って心配になりましたが、「今年は僕らが作ったものを売りたいんだ」と言って、放課後に針箱を持って、おたがいさんに女の子たちが集まってきて、その場で100円ショップで買ったフェルトなどを使っていろいろ作っていました。それを見ていたばあちゃんたちは、玉どめは裏ですするんだとか、指導して、子どもたちもいろいろ教わっていました。前日には原価計算とかしながら、ああでもない、こうでもないと言いながら、クッキーもたくさん作って、当日売っていました。

だいたいこういう行事を一回やると、180人から200人ほど、地域の方がやって来ますが、終わった後に、僕が「いくら儲かった？」と子どもたちのところに行ったら、「原価が200円だから、300円ずつ分けて、残りは全部被災地に寄付する」と。大人は何も絡んでいないのに子どもたち自ら「被災地に寄付する」という言葉が出てきました。それを聞いて、ちょっと泣きそうになりましたが。おそらく地域って5年、10年、15年かけて練っていくものであって、この子たちが今10歳ぐらいですが、あと5年、10年たったときに、た

ぶん地域のいろんな核になってくるのではないかと
思っています。

それから子どもとの係わりで言えば、今スタッフで
働いている女性は、お母さんがここのスタッフですの
で、彼女自身が小学校のときから、当たり前に出入り
していました。中学、高校とバスケット部で、部活が終わ
り、おたがいさんの風呂に入って頭をふきながら「た
だいま」と出てくるような娘でした。高校の進路指導
の際に、僕に何の相談もなく、進路に「あおいけあ」
と書いて、学校の先生から「この度はありがとうございます
と電話がかかってきて初めて知った、という
ようなこともありました。

駄菓子屋さんという楽しみ

おたがいさんの玄関脇には漫画が置いてあったりで
すとか、駄菓子屋さんを運営しており、そこの営業は
ばあちゃんたちがやってくれています。もちろん認知
症があるので、会計などは遅かったりするのですが、
子どもたちに「いくらだ」と聞いてお金をもらって、
また「釣りはいくらだ」と聞いてお金を返すというか
たちで支払いが成立しています。ここに関しては採算
部門ではないので、全部寄付してしまっているような
もので、レクリエーションだと思ってやっています。
それでも、だいぶ売れています。またスタッフたち
も、子どもたちを当たり前に関連してくるので、台風な
どで学校が休みになるともちろん子ども同伴で普通に
出勤していますし、結構当たり前、ばあちゃんたち
とスタッフの子どもと一緒に風呂に入っていたりしま
す。

お年寄りは豊かな社会資源

僕らの仕事は、介護保険と同じように、お年寄りを
被介護者にすることではなく、社会資源にしていくこ
とですので、例えば地域の公園の月1回の清掃活動や
花壇を作る作業なども、すべてお年寄りが参加して、
やらせてもらっています。そういうことをやっている
と、地域の花の会の人たちから逆に介護教室をやっ
てくれないとか、忘年会をやるけど、ばあちゃんたち
も一緒にどうですかということで声を掛けてもらい、私
たち自身も地域の一員として扱ってもらっています。

たとえばディズニーランドでは、キャストがゲスト
にサービスを提供するというかたちですが、うちの場
合は、高齢者とスタッフがキャストで、地域に対して

サービスをするという考え方で行っています。なの
で、マニュアルとかも一切なく、お風呂に入る時間も
決まっていないという中で、その日にやることを決め
るのですが、お年寄りもスタッフもキャストなので、
見る一見られるという関係ではなく、ともに地域をつ
くる仲間です。むしろ知的資産を持っているお年寄り
の方が上位のキャストになります。

お餅つきで地域の人たちをもてなす

去年お餅つきをやった時には、施設のすぐ横の畑で
けんちん汁の野菜を全部作り、小豆は大きい畑を借り
て作ったもので、ばあちゃんたちが選別して煮て、あ
んころ餅の材料にしています。そして、しっかり要介
護が付いているじいちゃんたちがお餅つきをしていま
す。また他にも、じいちゃんが稲わらを使ってしめ縄
飾りを作り、展示即売して売っていたり、ばあちゃん
たちも地域の方と混じってお餅を配っていますが、ど
の方がサービスを利用されている高齢者かわからない
ほど当たり前になじんでいます。こうして、じいちゃん
ばあちゃんたちが地域の方たちをもてなしました。

流しそうめんの行事の準備も、地域にあいさつに行
くところからお年寄りと一緒にいき、もらってきた竹
を子どもたちと一緒に割って、節を抜いて、やすりを
かけます。開会のあいさつも、僕の仕事ではなくて、
基本的にはお年寄りがすべてあいさつをします。そし
て、地域の方がかなり遊びに来ます。

自立の支援こそが介護の仕事

また、ある日の風景として、栗拾いに行きました
が、これは企画ということではなくて、その日、急に
「栗拾いに行こう」ということになり行きました。訪
ねた先の栗拾いの農家さんが老老介護のおうちで、ば
あちゃんが車いすの生活になっちゃったから出荷がで
きない、とのことだったので、「じゃあ、今年は手伝お
うか」ぐらいの勢いになり「あわよくばお金が出ない
かな」ということも考えながらやっています。ばあ
ちゃんたちもしっかり皮をむいて、渋皮煮をたくさん
作って、自分のうちにも持って帰りますし、地域の方
にも配っています。

よく聞く話ですが、介護現場が業務だけになってし
まい、介護職は専門職にもかかわらず、お茶を出すとか、
トイレに連れていくとか、専門性がほとんどない
誰でもできる仕事をやって、これでほとんど終わって

しまっていることが大きな問題だと思っています。そして、どうしても支配的、管理的な仕事になってしまっています。僕らが本当にしなければいけないのは自立の支援なので、逆に、一緒に掃除をしたり、一緒にお茶を入れることで、自立の支援につなげていくことが大切だと思っています。

地域への社会参加で幸を広げる

今回のテーマである地域についてですが、なぜ僕らにとって地域が必要なのかというと、地域がないと、お年寄りは社会資源になりません。施設の中でお年寄りと掃除をしていたら自立の支援にはなりますが、施設ではなく神社や公園で掃除をすれば、社会参加でありお年寄り自身が社会資源となり、親子連れから「いつもご苦労さまです」とお年寄りが言ってもらえる。また庭でお花を植えていたらレクリエーションですが、公園の花壇でお花を植えていると社会参加になります。だから、活動する場所が広がっていけば広がるだけ、お年寄りも幸福になっていくし、スタッフの専門性も幸福度も高まってくるので、どんどん外に出ていっています。

統計を見ると、ボランティアの参加率で一番高いのは65歳以上の男性ということなので、「散歩に行こう」と声を掛けてもなかなか出てきてくれない男性でも、「掃除に行こう」というと、みんな出てきてくれます。そこで今、スタッフたちと考えていることとして、学校の登下校の下校時間に月1回とかではなくて、じいちゃんばあちゃんと地域クリーンに頻繁に出掛けると犯罪の抑止にもつながってくるのではないかと、といったような戦略を練っています。

心根の優しい介護職が働ける場を

うちのスタッフさんたちは、利用者さんのことを看る対象ではなく、いろいろなことを教えていただける対象だと思っています。介護現場では離職率が高く、やりたい人はいないということが、よく問題になりますが、うちのスタッフさんたちは3年以上、介護職の離職はゼロです。これは簡単なことで、基本的に介護職は銭金の問題ではなくて、人の役に立ちたい、人のために働きたいという人が多い一方で、多くの現場では人の管理や支配をさせるのが仕事になってしまっています。そして心根の優しい人ほど、その現場からいなくなってしまうという変な環境になっています。な

ので、その方たちが誇りを持ってお年寄りのために働ける職場をきちんとつくることによって、外国から介護労働の人材をよばなくても、きちんと介護人材の地産地消はできると、僕は思っております。

小規模多機能は、本来、自宅や病院といったところを支えていけばよいサービスではありますが、それを近所の子どもたちとの係わりをはじめとして社会活動などを理念に置けば、どんどん活動の現場は施設から近所へ、さらに地域社会に広がっていくと考えています。外に開くためには、例えば子どもたちが遊んでいたら危ないよというような発想になってしまったらできませんので、介護の質あるいは、認知症に対するケアがきちんとできないといけません。そのあたりは必須条件になってくると思います。基本の日常的なサービスとしては、お年寄りがプライドや生きがいを取り戻して活動できるような環境をつくっていくと、お年寄りはゼロからプラスになってくるということでやっております。

ご清聴ありがとうございました。

対 談

地域力を育てる鍵は？

早野 透（桜美林大学教授／元朝日新聞編集委員）

高島肇久（株式会社日本国際放送特別専門委員／21世紀かながわ円卓会議運営委員）



プロフィール：早野 透（はやの・とおる）

桜美林大学教授

1945年生まれ。東京大学法学部卒。1968年、朝日新聞入社。おもに政治記者として日本政治を取材。1996年から朝日新聞紙上でコラム「ポリティカにつぼん」を連載。現在、朝日新聞デジタルに「新ポリティカにつぼん」連載。著書に『田中角栄―戦後日本の悲しき自画像』（中公新書）、『劇場型アモクラシーの超克』（中央公論新社）、『田中角栄と戦後の精神』『連立攻防物語』（朝日新聞社）、『日本政治の決算』（講談社）など。



プロフィール：高島 肇久（たかしま・はつひさ）

株式会社日本国際放送特別専門委員

1940年生まれ。学習院大学政経学部卒業後、63年NHK入局。ワシントン支局、ロンドン支局長、報道局国際部長、『NHKニュース21』でのキャスター、報道局長、解説委員長などを経て退職。国連広報センター所長に就任し、日本国内での国連のPRを担当。その後、外務報道官として、日本外交のスポークスマン役を務め、退官後も参与として広報面のアドバイザー役となる。2006年からは学習院大学法学部特別客員教授と国連大学学長特別顧問に就任。2008年9月より2011年5月まで株式会社日本国際放送代表取締役社長を務める。

対 談

地域力を育てる鍵は？

早野 透（桜美林大学教授／元朝日新聞編集委員）

高島肇久（株式会社日本国際放送特別専門委員／21世紀かながわ円卓会議運営委員）

高島

早野さんは、桜美林大学で教授をなさる一方、10年以上にわたってスローライフ運動を率先して取り組み、日本に広めるということもやっておられます。この運動は朝日出身の名ジャーナリストでありました筑紫哲也さんが、生前、中心になって進めていらしたものです。そうしたご経験に加え、田中角栄の取材を通じてご覧になった新潟県——特に新潟第3区の選挙区——における地域の実情の現状なども含めて早野さんからお話を伺いつつ、「地域力をどう高めるか」という、今回の円卓会議のテーマに沿ったお話をお聞きしたいと思います。私自身もどのようなお話が伺えるのか大変に楽しみにしております。

まず、最初の質問として早野さんに伺いたいのは、昨日、今日と議論をお聞きになっていて、今どんなご感想をお持ちか、そこからお話いただけますか。

早野

私が改めてひとしきりお話しするのは、いかにも蛇足のような気がいたしますが、プログラムとしてありますので、その役割を果たすためお話しいたします。

昨日は下條村の伊藤村長さん、それから逗子市の平井市長さんのお話を伺いましたが、なるほどな、と思いながら聞いておりました。下條村長さんは、もっともっと役場の職員が働くべき、ということをお話しされていましたね。逗子市長さんのお話の中で印象的だったのは、市民も縦割りだということです。行政機構が縦割りであることは、官僚機構の縮図のようなものですが、市民もそれぞれ横のつながりが必ずしもあるわけではないのかなと思いながら聞かせていただきました。

そして今日は、むしろ市民の側からといいますか、下からと言うべきか、沸き上がる大きなチャレンジや絶え間ない営み、そして隣人に対する思いといったものが一つの社会活動になっていくお話をたくさん伺いました。私はあまり何も知らないまま、のこのこ出て

きて自分で吸収することが多く、ありがとうございました。おそらく何か結論めいたことがあるのではなく、こうした社会的な動きについて今後も議論したり、行動に移していかなければいけないのだと思った次第です。

高島

ありがとうございました。今日の基調講演で、内山節さんが70年代の途中から群馬県上野村に一年の半分は住んでおり、風邪をひかれたのも山に登ったからということもお話をされていましたが、実は早野さんも東京と田舎の二重生活のようなことをやられていますよね。群馬県南牧村（なんもくむら）に桜美林大学の学生を毎年連れていって、いわゆる山間の村の暮らしと都会の暮らしとを自分自身で比較しながら体験をさせるということをやっておられます。学生を村に連れて行ったときには、単に学生も活動するだけではなくて、地元の人たちともよく対話をされるなど、交流されていていらっしゃるそうですね。

まず、ご自身の村での経験、体験を基に、今回の円卓議論の中で出てきた地域力、特に新しい時代の地域づくりといったものが、実際にこの南牧村ではどのように進んでいて、また早野さんご自身がどうしてこの村を選ばれたのかということも交えてお話をいただけますか。

早野

まず高島さんのご質問に答える前に、本日の内山さんの話を聞いてびっくりしたのですが、内山さんの家があるのは上野村。あの村は以前、日航機が落ちたところですね。私が通っている南牧村は、「なんもくむら」と読みますが、長野県にも南牧村があり、読み方が「みなみまきむら」です。群馬の南牧村は上野村と隣です。そこに毎年、桜美林の私のゼミ生——女子学生が多いですね——とともに行っています。なぜ行っているのかといえば、先ほど紹介していただいたよう

に、スローライフ運動をここ十数年やっていますが、筑紫さん、それから朝日の先輩の川島さんのお二人がリードしており、実は筑紫さんが亡くなられた後、スローライフ学会が立ち上がり、学会の会長を、この会議のモデレーターでもある神野さんが務めていらっしやいます。

その南牧村で知り合った、神戸とみ子さんというすごくエネルギーなおばさんに、学生たちに昔ながらの生活を体験させたいと思い、相談したら、私のところにいらっしやいよということになり、毎年行っている次第です。南牧村は、高齢化率が57%で日本一です。信号機は一つしかないし、コンビニはもちろんありません。谷筋をずっと入っていった奥にある山村です。上野村は隣にありますが東京電力の発電所があって、そこからどかとお金が入るので立派な村ですが、南牧村は何もなく、すごく貧乏です。しかし、神戸とみ子さんは自ら“ふるさと再生仕掛け人”を名乗り、私たちのスローライフ活動の中の一員として大活躍してくださっています。本日の議論の中でも「地域力」というのは何だという話があり、人、リーダーシップ、そしてつながり、ということなどがあげられましたが、「そうだ、神戸とみ子さんこそ、まさにその地域力だ」と思ったほどです。彼女に頼り毎年、村に行きますが、彼女の紹介で村長さんとも毎年会いますが、神戸さんの方が村長よりも遥かに元気がいいですね。

今年は小学校、中学校の授業を見学したり、一緒に給食を食べましたが、小学校は38人、中学校は22人しか子どもがいません。1学年一人しかいないという学年も小学校にはありますが、子どもたちが少なくなり、一方ではお年寄りが増える。村全体の人口は2,900人ほどですが、老人ホームの入居待ちが90人いるとか、それから100歳以上のお年寄りが9人いるとか、ある意味では幸せな村かもしれません。

先生によれば、村の子たちは中学校を卒業すると、高崎などにある高校に行かなくてはいけないので、そうすると、急にどかっと大人数の中で暮らしていかなくてはならない。今までは例えば4人ぐらいのクラスで、すぐ当番が回ってきて嫌だ、なんて子どもたちは言っていますが、先生たちは、高校に入った時に、大人数の雰囲気や圧倒されないように子どもたち自身に自信をつけさせたいと一生懸命がんばっていらっしやる先生方がたくさんおられました。

それから、この村の産業としては、スギの木、養蚕、それからコンニャクの3つでした。昔は、こうした産

業で結構、繁盛していたそうですが、最近はスギの木などは、非常に安くなっているそうですね。養蚕についても、近くに富岡製糸場があったので、明治以来、富岡製糸場に蚕の繭を出荷していました。しかし、製糸産業そのものが衰退し、今では富岡製糸場も世界遺産の候補になるような時代です。それからコンニャクについては、もともと育てるには傾斜地が適していたのが、平地でもできるように品種改良されたことで、今度は南牧村のような傾斜地で育てるのはむしろ割が合わない、という事態になりました。ただ、まだ残っており、みなさん懸命にやっています。

僕の学生たちも、このコンニャク作りをはじめ、農家のトマトを摘んだり、それから林道の脇で薪割りなど、いろいろ経験させてもらっています。桜美林大学に通う学生は、ほとんどが神奈川県の学生で、いわゆる都会っ子です。アルバイトやさまざまな授業の課題もあり、何だかんだいって、学生たちも忙しく大変だけれども、初めてこういう村に来たという子が多く、昔ながらの生活の原型みたいなものを体験してほしいと思って、毎年行っています。

今回の円卓会議の「地域力」という話を伺いながら、南牧村の地域力はどうか？と考えてみると、それほど芳しいものではないのかもしれませんが。ただ、であればこそ、何か頑張ってみようという、その地域リーダーが出てきて何とかやっているという状況です。ちなみに“なんしいちゃん”という南牧村のゆるキャラも作っています。いずれにしても、懸命に一つの山村として生きようとしている、その姿に学生たちが触れることは貴重な体験だと思っています。

高島

本日の内山さんの基調講演やお書きになった本も何冊か読んでみましたが、それによれば、内山さんの上野村では、行政に頼るよりは住民たちがお互いに助け合い、また必要に応じて、例えば困ったときは1年間、周りが面倒を見ろといったような昔ながらの伝統がずっと残っています。また信仰も、山の神様をはじめ、いろいろな神様がそれぞれの場所にて、その共通の祈りが、村の人びとをつなぎとめる絆のもとであり、そこから地域力、コミュニティ力が生まれてくるというようなお話があったかと思いますが、早野さんも、南牧村でそうしたことは感じられるのでしょうか。

早野

ええ、もちろんです。今日の内山さんのお話でも、

自然、人間、それから祈りと、この3つで上野村の共同体が成り立っていると。おそらく日本の古い共同体はそうした仕組みだったのでしょ。内山さんのような哲学者が上野村で感じる深さと同じように感じる、というところまでは行きませんが、私も南牧村で同じように感じています。でも実際は、そこまである種、ロマンチックなものよりは、やはり厳しい生活の中で苦闘の方が目につきますね。何年か前には台風で1週間も水浸しになったということもありました。

本日の共同体論も大変深く興味深いものではありませんが、これが横浜や川崎などの都市部の市民のたくさんいるようなところで、この共同体のかたちが当てはまるのだろうか。私が思ったのは、“民主主義”や“市民”という概念が出てきて、市民のつくる共同体、市民のイニシアチブによる共同体は、内山さんのおっしゃる伝統的共同体そのものではないような気がします。と言いますのも、伝統的共同体は素晴らしい面もありますが、その一方では内部の差別や抑圧もありました。例えば、NHKドラマの『おしん』は、まさにそういう抑圧の中から出発して生きていくという話でした。という意味でいえば、僕自身は、市民と民主主義、そこからつくり上げる共同体ということが大切になってくるかと考えています。

高島

そうした意味では、昨日の下條村の村長さんのお話でも、住民が率先して、もしくは住民が自分たちの村を自分たちの力でもって運営していくんだ、という意識を持つことによって、村は大変、豊かなになっているということでした。そうしたものと比較して、南牧村はどんな感じでしょうか。例えば、神野さんが先ほど、あの村の下水道が浄化槽によるものということが財政好転の一つの大きな理由ではないかというご指摘もありました。

早野

そうでしたね。下條村は、私は実態は全然知りませんが、昨日のお話では、基金も何十億円もあるそうですが、おそらく村長さんの言いたかったことのひとつとしては、役場がとにかく最小限やらなくてはいけなことだけやって、あとは、もっとみんなで働こうよということだったかと思います。そして基本的には役場の職員はどんどん減らしていった中で、村全体として活性化させていきました。「しかし、待てよ。そういうことでいいのかな」と、これも少し疑問に思ったと

ころがあります。

南牧村も貧乏ですが、特に教育に対して予算をつけています。小中学生の給食費は無償にしたり、山奥の分校はすべて廃校にしたので通学が大変になり、その費用を負担しています。ただ、とうてい理想的な運営とは申しがたい。四苦八苦しながらやっているという状態です。

高島

そうですね。先ほど、早野さんが引率していかれる桜美林大学の学生たちのほとんどは、初めての体験だとお話しされていましたが、学生たちの反応はどのようなものですか。

早野

この神奈川県も含めて、日本が急速に都市化していく中で育ってきている若い世代なので、村で体験することは驚くことが多く、ある種の感動を持って帰ってきます。たとえば夜中に空を見上げると、ものすごく星が見えるので、「こんなに星ってたくさんあったのか」ということであつたり。学生たちも、あの星を見ると、人間というもの、それから自然、宇宙あるいは神というものを実感しているようです。そこまでは、なかなかうまく学生諸君も表現しないけれども、そうした感じを受けます。

高島

今回の円卓会議では、“地域力”について話し合っていますが、地域の住民自身がその地域に対してもっと愛着を感じ、ある意味では責任感も持つようになるということが、この円卓会議のテーマの大きな目標の一つだと思いますが、実際にそういう学生の中から、地域という問題について考える機運は生まれてきているのでしょうか。

早野

生まれていますね。私が最初にゼミを持ったときの女子学生が、東京で結構いいところに就職したのですが1年で辞めてしまいました。そして、山形県小国町のふるさと青年協力隊のような制度を使い、移住しました。心配なので、この夏に、彼女のもとに訪ねてみましたが、最初はやはり苦労も多く、まわりも「いったい君は何しに来たの。農作業の手伝いに来たの？」というような受け止め方だったのが、日々努力しているうちに、徐々に、その地域コミュニティの中に入っ

ていったそうです。

私が行ったときは、10人ほどのお百姓さんをお寺に集めてくれて、当時はTPPが農家にとってどうということなのかということをみんなが心配しており、話し合う会をしました。山形県の農村には、とても素晴らしい取組みをされており、そうした地域で、米や野菜を作っている人たちの話に大変こころを動かされて——「私は新聞記者だ」といって自分が記事を書けば世の中、変わると思っていましたが、そんなことも吹き飛ばすほどでした——帰ってきました。

そうした地域の中に私の教え子が入っているというのは、先行きどうなるのか心配ではありますが、とても幸せなことだと思っています。もちろん学生すべてが、そうした道を選ぶわけではありませんが。

高島

今日、『里山資本主義』という既に15万部を突破した角川新書を持ってきましたが、これはNHKの広島放送局のディレクターが藻谷浩介さんとともにまとめたもので、岡山県の真庭市や中国山地のいわゆる過疎の村など中国地方で実は大変素晴らしい取組みがああり、それについて紹介しています。先ほど、杉の木が売れなくなってしまったという南牧村のお話もありましたが、結局、現金収入がほとんどないままどんどん廃れていった山間部の村で、(言葉で表現すれば月並みですが)地産地消で、木材はバイオマスの発電やもしくはペレットにして暖房や毎日の煮炊きにまで使うといったようなことで、とても元気になった。

その本では、他にも例えば高知県、島根県や鳥取県など、さまざまな取組事例を紹介しております。たまたま早野さんもこの本を偶然お持ちになっていて、なるほど、地域の力とは何か、と考えると、今お話があったように、新しい角度から自分たちの地域にあるものを見直すと、実はこれは大変なエネルギーを持った力を発揮するという事ではないかと思えます。

早野

そうですね。私の友人で増山麗奈という女性の画家がおりますが、彼女とは、イラク戦争反対のデモの取材の中で知り合いました。彼女は東京に住んでいたのですが、福島原発の事故をきっかけに子どもが2人いることもあって神戸の山のそばに転居しました。そして、先日、深夜バスで来て訪ねてきてくれた時に「早野さん、私、里山資本主義やっているのよ」と言い、近所の人に話をつけて、少し田んぼを借りて、自分で

お米を作っていたり、イノシシやシカが結構増えているので、そうした肉も食べられたりして、お金はなくても何とか暮らせる、とのことでした。新幹線で東京を往復するようなお金はないから深夜バスで来たのだけど、でも、そうしたことがみんな楽しい、と彼女は話し、そのような暮らし方もあるんだなということを感じ、これからの時代の一つの生き方なのかなと思いました。

それで「この里山資本主義というのは、国家の体系としては成立するのか」と尋ねたら、「早野さん、そんなばかなことを考えているから駄目なのよ。つまり国家の体系とか何とかじゃなくて、自分の住むところ、地域でちゃんと暮らしていける、それでいいじゃない」なんて言われまして、なるほどと思い、そんなことがきっかけで本を読みました。

高島

何かそれがスローライフの根源というか、一番の基本ではないかなという感じもしますね。

早野

私のゼミでは、先ほどお話ししたように夏は南牧村に行きましたが、9月には福島原発にも見学に行きました。現地の人にお願ひしてマイクロバスで行きましたが、女子学生もいるので、彼女たちの将来に何かあったら大変だと思い、線量計を持って常に気を使いました。そして檜葉町や富岡町などに行きましたが誰もおりません。そして、檜葉町のお寺を訪ねた時に、ちょうど住職の奥さんがおられて、昼間だけいらっしゃるとのことでした。そして、そのご本尊の前に6つほどのお骨の箱があったのですが「これを埋葬できないんですよ。みんな来られないし、お墓のどこに埋めていいかということも分からず、とにかくここにお預かりしているんです」と、涙を流しておられました。

貧乏で金がなくてもスローライフを送っている南牧村のようなところがある一方で、おそらく原発交付金のような補助金がどかんと出て、しかし結局、放射能事故によって、もう人が住めなくなってしまうまちもある。先日、石破幹事長は、そろそろ、もう帰るのをあきらめる時期ではないか、ということを発言されています。みんな、何とか帰りたいといってここまで希望をつないできたところに、そんなことを言っても、どうもこんな状態では帰れませんよ、という話になりかかっているのです。

原発という文明の極致のようなものがある地域の方

が、生活が失われている状態です。そういう意味でいうと、私たちが、例えば東京や、横浜、川崎などの神奈川の都市部で、子育てや高齢者ケアなどさまざまな活動によって人びとの間をつないでいくことは、昨日から伺っていると、大変な困難をいっぱい抱えながらも、原発事故で住めなくなった地域のことを思うと、これはある意味、まだ幸せなことなのだと思います。

内山節さんの『文明の災禍』という本はすごくいい本だと思って読ませていただきましたが、原発事故で、自分のふるさとが失われてしまうということは、文明の結果とも言えるのでしょうか。地域力が今日のテーマではありましたが、そういった視点で、その地域力の先に広がるものとして、大きな文明のありようについて問われてくるのではないかなと思った次第です。

高島

私自身も福島、それから宮城、岩手の被災した辺りを毎年、自分の車で走り回って様子を見ていますが、立ち退きを命じられた原発周辺の福島の町や村には人がおらず、田んぼは荒れ放題となり、見捨てられた、忘れられた佇まいになっています。おっしゃるように、ああ、これが文明の一つの亀裂なのかなと思うと、極めてむなしい気持ちになります。

早野

そうですね。田んぼももうつくれず、真っ黄色のセイタカアワダチソウが生い茂っています。そこにまた除染した土をバックしたものが山積みになっています。最近、小泉純一郎さんが盛んに脱原発と言っていますが、今さらという感じもあります。ただ核のごみの捨て場はないんだということを、今さらながらも言ってくれるのであればありがたい。そして、原発はもうやめた方がいいんだということにつながっていけば私も思います。

高島

私たちが昨日、今日と話し合ってきたことは、まさに自分たちの住んでいる地域を、いかにして住民の力、それから住民の意識を高めることによって、もっともって住みやすい場所にするか。そのときに行政に何を求め、また行政を動かすためにどんな方策があるのかといったようなことを話してきましたが、そうしたことが話せる私たちは、福島のあの被災者の方々に比べると、はるかにラッキーだということは十分言え

ると思います。

もう一度、話を私たち自身に戻したいと思います。今日、昨日と話してきた中での地域力について、早野さんが実際にご覧になった南牧村もそうですし、それから東京の中でも、たとえば早野さんがお住まいの新宿区神楽坂などコミュニティ意識が大変強いところもありますね。例えばお祭りなどに現れる、地域住民の連帯がその原点として、羨ましいくらいにあります。そういうことを考えると、その早野さんからご覧になって、今後、私たちはいったいどういうかたちで地域力を高めていけばいいのか。今までのご経験やご覧になったこと。さらにあえて言えば、田中角栄を取材されているなかで、山古志を含めて新潟第3区という選挙区のあたりをご覧になって、あの当時と今、比較してもずいぶん大きな違いが生まれているような気がします。

早野

私が神楽坂に住んでいるのは、まさに戦後、焼け野原になったときに、おやじとおふくろが疎開先から戻ってきて、自分たちで瓦礫を片付けて、その小さい土地に掘っ立て小屋を造ったところから始まっています。しかし、新宿区神楽坂という地域はなかなかいいところで、昔の地名をそのまま残しています。小さい町がいろいろありますが、大ざっぱな何とか何丁目というのではなく江戸以来の地名をきちんと残そうという気運があり、そのせいか、それぞれのお祭りが結構残っています。

今、区長は中山さんという女性ですが、お祭りになると、選挙を意識しているのかもしれませんが、すぐ顔を出してきて、非常に親しみやすい方です。この神楽坂には、昔は待ち合いだとか、さまざまな料亭があつて田中角栄さんも遊んでいましたが、今はほとんど滅びてしまいました。でも、昔の石畳が残っており、最近、モンマルトルに似ているということでフランス人が多いですね。

最近、豪華なマンションも建っていく中で、戦後からずっと住んでいる私たち庶民と一緒に町内会活動をするのもなかなか難しいですね。町内会費なんて200円だったのが、マンション住民から半額に減らせ、と言われて100円にしたりして、ほそぼそとやっています。ただ、子どもたちが集まって秋の祭りをやると、マンションの住民も出てきて、それをフランス人が見に来たりすると、マンションに住んでいるエリート商社マンがフランス語で案内したりしているので、こう

したかたちで新しいコミュニティも生まれるのかなという気もしています。

田中角栄さんみたいな金権政治家を取材していた一方で、スローライフの活動などは、なかなか話がつながらない方がたぶん多いかと思います。でも、角栄さんという人は、貧しい新潟の農村から15歳で出てきて、さまざまな丁稚奉公をいっぱいやってお金もうけをして、そして軍隊にも行き無事に戻ってきて、戦後、代議士になりました。もちろん金権政治は否定されるべきだけれども、彼の政治行動は詰まるところ、国家よりも地域なんです。中曽根さんなどは、とにかく国家の復権だ、戦争に負けた恨みを晴らすんだ、というような発想がどうしても先に立つ。これは東大法学部で矢部貞治先生などに教わったりしたことからそう考えるようになっていくのかもしれない。

田中角栄さんには、物事の具体的な積み上げや自分の経験しかないから、まさにそういったことがまったくない。軍隊では二等兵ですから、ぶん殴られてばかりいましたので、そうすると、当時言われた大東亜共栄圏や満州の五族協和など、彼はそんなのはちっとも信用していませんでした。「そんなばかなことはないんだよ。とにかく軍隊では殴られてばかりいるんだから」ということで、戦後の彼が総理大臣になるときの公約は、憲法9条を根幹とした日中国交正常化でした。それを安倍さんが今ひっくり返そうとしています。地域の中から生み出していくお互いを助け合う社会をつくるには、まずは平和でなくてはならない。ですから、そうしたことで、私の中では、角栄さんとスローライフと市民とが案外つながっています。

越山会は、その地域に公共事業を持ってきたほしいという集まりだと非常に喧伝されていますが、もともと越山会に集まった人たちは、戦前は小作人であり、要するに農村の小作争議をやっていた人たちで下からの民衆組織でした。地主や県庁を相手にしていたのが、それが戦後になって農地改革で自分たちも田んぼを持てるようになったことで変わってしまった。その前は社会党を応援していたのが、今度は角栄さんに頼もうという構造になりました。

だから、あの時代の農民たちの「自分たちの生活をとにかく豊かにしたい」という思いは、戦後復興とつながっていました。でも農村もかなり豊かになり、また時代は新しく変わって、今回の円卓会議で議論されているような、介護や子育て、少子高齢化といった問題が生まれる状況になっています。こうした問題を考えると、確かにもうイデオロギー云々が問われるよう

な時代ではないという思いもします。ただ、そうした諸問題が行政の中で縦割りにされて、つながっていないという懸念もあります。

僕は今回、いろいろなお話を伺って、その民主主義というのは永久の営みだという気がしました。「民主主義は永久革命」という言葉もありますが、つまり、これで完成ということではなく、日々の努力が求められるものだ、と。まずいことや失敗もあつたり、そして、がっかりすることやくじけてしまうこともあるけど、それでも少しずつでも前に進みたい、良くなりたい、良くなってみんなが幸せになりたいという、言葉で言うと何となくキザっぽくなるけれども、そういうことでしょう。そういう意味で、地域力というのは、いわば“民主主義の小学校”ではないかと思った次第です。

高島

ありがとうございます。先ほど、午前中のまとめの段階で、神野さんから、日本では行政に甘えるなどよく言われるけれども、それは本末転倒だというお話がありました。確かに振り返って考えてみると、1960年代、70年代、住民は、例えば田中角栄のような政治家を使つて、行政からいかに自分たちの地域を豊かにするためのお金を引っ張り出してくるか。それこそ、いろいろな工事を持ってくるかということが重要でした。

そうした時代が終わり、新しい時代では、「行政に甘えるな」ということではなく、さまざまな課題を抱える中で、自らできることは自分たちで行い、「行政にはここをやってほしい」というところについては住民の側から行政に対して強く言う。それをまた、先ほどお話があった地方の政治家も、その辺の感性をもっとするどくして、住民の望みをきちんとくみ上げて行政を動かすという、好循環が生まれることが、これからの日本の地域力を高める上で必要になるかと思います。そのような時代に合った民主主義を私たちは構築する必要があるかな、と感じました。

時間をちょっとオーバーしましたが、これにて早野さんとの対談を終わらせていただきます。早野さん、ありがとうございました。

早野

どうもありがとうございました。

地域力をいかに育てるか

～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～

2015年3月27日 発行

企画・編集 公益財団法人かながわ国際交流財団 湘南国際村学術研究センター(担当 清水紀人)

<http://www.kifjp.org/shonan>

〒240-0198

神奈川県葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内

電話 046-855-1821 ファックス 046-858-1210 メール shonan@kifjp.org

© 2014 KIF

本書の全部または一部の複写・複製等を禁じます。これらの許諾については当財団までご照会ください。

開会挨拶 福原義春 公益財団法人かながわ国際交流財団理事長

趣旨説明 地域力をいかに育てるか～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～

モデレーター：神野直彦 東京大学名誉教授

講演 1 村民とともに歩む地域づくり～子ども・若者が元気な村に～

伊藤喜平 長野県下條村長

講演 2 新しい地域自治～地域の課題を地域で解決するために～

平井竜一 逗子市長

基調講演 生きている共同体とは何か ～関係を生み出す社会デザインを考える～

内山 節 哲学者

基調講演／討議〈冒頭発言〉

山梨崇仁 葉山町長

事例報告 1 多様なかわりによる子どもの育ち

奥山千鶴子 NPO 法人びーのびーの理事長

事例報告 2 地域全体を見据えた高齢者ケア

加藤忠相 小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん経営者

対 談 地域力を育てる鍵は？

早野 透 (桜美林大学教授／元朝日新聞編集委員)

高島肇久 (株式会社日本国際放送特別専門委員／21世紀かながわ円卓会議運営委員)

